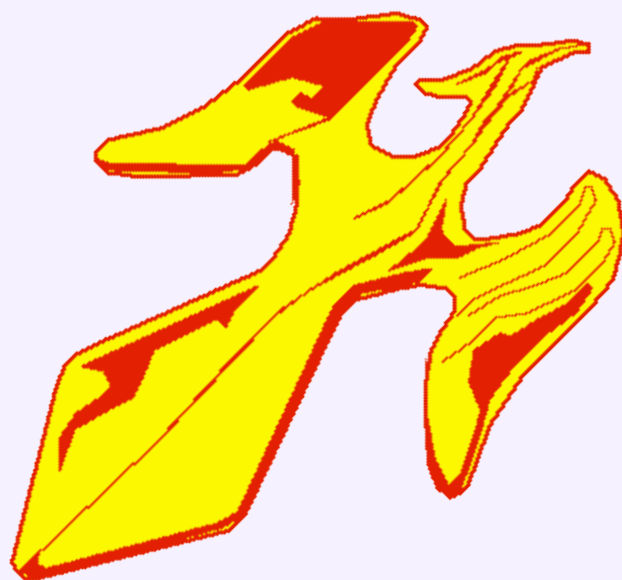


10²³年後

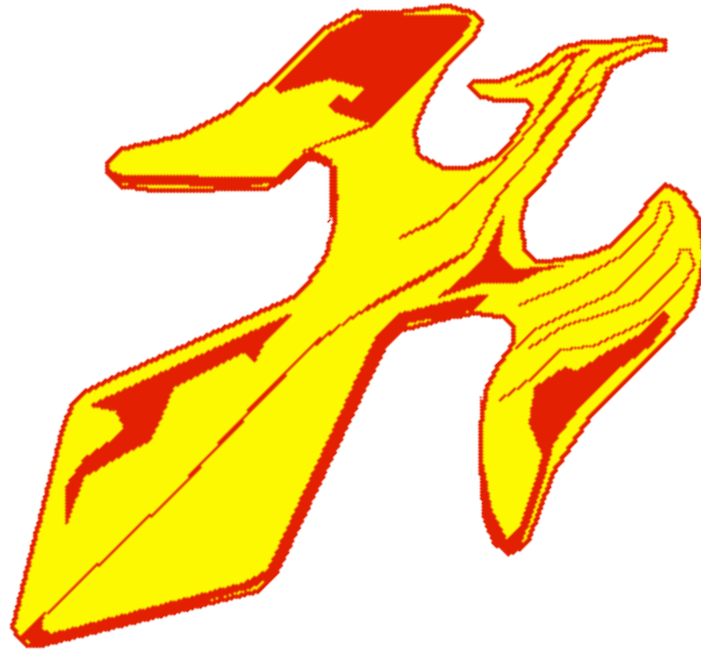
N=RfpneflifcL



足立 剛
Tsuyoshi
Adachi
thin-p

10²³年後

N=RfpneflifcL



足立 剛

Tsuyoshi

Adachi

thin-p

Tsuyoshi Adachi-01

2000.02.29

10²³年後

N=RfpneflifcL

Prologue

第1章 year of 1991

第2章 Devil gate drive

第3章 Heavy Weather

第4章 telephone line

第5章 no time this time

第6章 MANEO-1999

第7章 Still In Love With You

an epilogue.

これは創作です。

(C)足立 剛 / Tsuyoshi Adachi / thin-p

参考文献：SPACE ATLAS (PHP研究所)

芸術新潮 1998/07 (新潮社)

ドルイド僧 (主婦と生活社)

Prologue

約束の時間までまだ15分ほどある。

あまり早く着き過ぎてもなんか照れくさいような気がして、とりあえず車の燃料を入れるためガソリンスタンドに入った。ハイオクを満タンにしてくれるよう無闇に元気な店員に告げて、フロントガラス越しに冬の空を僕は見上げた。今夜は少し冷え込みそうだ。

3カ月前にはこの時間にフリーになることなんて想像すらできなかった。

たとえ自分の仕事がすべて片付いたとしても、セクション内のちょっとした仕事の遅れや問題点が気になって、手を出さないまでも成り行きを見届けなければ完了した気になれないという事が積み重なって、もともといい加減な性格が、まるで別人のように変わっていき、次第に周囲も自分の事を完璧主義者のように接するにつれ、どうしようもない苛立ちを覚えた。

自分のプライベートな時間を持てなくなったのは、仕事上のチームのせいにしたくなった。でも結局、そんな空気を自分自身が作っていたのだと気がついた時に、僕はフリーランスになった。

待ち合わせの場所を指定したのは彼女だった。

繁華街からは少しはずれた路面店のセレクトショップを彼女は指定した。

平日の午後5時少し前なので、まだ渋滞はなかったが、やはり付近に路上駐車ができるスペースはなく、僕はワンプロック先の幹線道路に車を停めて指定されたショップに小走りで向かった。最近身体を動かしてないなということを、動悸を激しくした心臓が僕に告げていた。でもこの動悸は運動不足によるものだけではない。

彼女と会うのは実に4年ぶりだ。

新しい年の最初の月の最後の月曜日。こんな時間にこうしてスーツではないラフなスタイルでこんな所を走っている自分を、かつての部下や外部ブレーン達、そしてクライアントが見たら驚くか気づかないかのどちらかだろうと考えた瞬間、少し気持ちが和らいた。

数年前、彼女宛の年賀状に書いておいた僕のメールアドレスに彼女からのメールが届いたのは、ちょうど1週間前だ。突然のメールに僕は懐かしくも複雑な思いになった。

彼女に会いたい。でも会えたとして何を話せばいいのだろう。まして、このメールは果たして本当に彼女からのものなのだろうか。

アカウントは数字とアルファベットの組み合わせだし、ドメインやプロバイダで相手のことを分析出来る程の知識は僕にはない。仮に誰かが彼女の名を語り、僕宛にメールを送ったとして・・・いや、その仮説は成り立たない。

なぜなら、彼女と僕の関係を知る者は既に1人としてこの世に存在しない。

僕は返信メールを送った。「会いたい」と。

翌日彼女から再びメールが届いた。そして日時と場所を指定してきた。
今僕は、“その”日の“その”時間、“その”場所に到着した。
彼女はまだそこにはいなかった。（2分前か・・・）

いらっしゃいませ、という店員達を無視して、奥行きのある店内を見渡ししながら、ガソリンスタンドで時間を調整して、更にここまで走ってしまった自分に（何をやってるんだ？）と、もし誰か他人であれば少しバカにして言っていたところだと僕の心の中に嘲笑が湧いた。

80年代初頭の大学生のファッションの象徴であったショップロゴの入ったスウェットシャツで人気だったこの店は僕が学生の頃はこの街には無くて、わざわざ東京まで出掛けたものだったことを懐かしく思いながら入り口の方を振り返った時、彼女が現われた。

そこに立っていたのは紛れもない、彼女だった。

数年前初めて彼女に出会った頃、あと何年かしたらこういう女性になるだろうと想像したことがある。その時の僕の未来に対する記憶に現在の彼女は恐ろしい程一致していた。胃の底の方が何かに摘まれたような感じがした。

真っ黒ではない肩につくつかつかないくらいの髪。シンプルな黒いニットにシンプルな焦茶色のウールマフラー。モスグリーンのトリミングが施され、微妙に焦茶色に見えなくもない黒いロングスカート、そしてヒールのない黒い靴。

ほぼ黒で統一された彼女のファッションは、決して重いものではなく、むしろ、きっと今心が軽いのだろう、そのどこかすっきりした表情と相まって軽快な印象を与える。

そうか、彼女のバッグの色だ。磁器のような、それでいて柔らかい毛布のような、微妙な色合いの生地で作られたショルダーバッグが、黒を生かしているんだ。ファッションの分析なんかしたことない僕がそんなことを考え納得していることに、自分でも少し可笑しくなった。

時間を実際に計っていたならきっと数秒だと思うけれど、なかなか言葉が出て来ない。「やあ。」と言ったきり僕は長い時間が過ぎていく感じで。

うまく話せない僕を彼女は極自然に促して僕達はショップの外へ出た。

ごぶさた、とか、元気だった？などという、ほんとうに陳腐なやりとりしかできないでいる自分に対して苛立った。

「寒いしさ、とりあえずそのカフェで作戦会議だ。」と表面的に明るく言うのがやっとだった。

今日僕はすべてを確かめるという目的を、もういちど心の中で確認した。
あの日から今日までのすべてを。そして僕達はどこに向かうのかを。

「これで雪降ったら少しはロマンチックになるかな。」という僕の間抜けな切り出しに、彼女は、いつも潤っているその大きくて特徴的な目でかすかにそしてかつてと同じように“微笑”を表現した。

とりあえず、今は熱いエスプレッソをダブルで。まずはそれからだ。

第1章 year of 1991

もう、何日休んでないだろう。

休みがとれたら、何をしよう。たくさんありすぎてわからなくなっているのと、とにかく誰にもじゃまされずに、死ぬ程眠りたいという欲求が何にも勝る今の状態で僕はこの時間になると、朦朧としてしまう。

僕は去年30才になった。

なってしまった、という感覚と、やっとなった、という感覚があると誰かが言っていたけれど、僕にとってはそのどちらでもなかった。誕生日を挟んでこの1年間というもの、仕事上の大きなプロジェクトで責任者を任されてすべてが忙殺されてしまった。やりたくて申し出たことだったし、とにかく絶対に失敗できないというより、絶対に成功させなくてはならないという全社の期待を結果的に一身に背負ってしまったので途中でリタイアできなくなって、しかし確かに成功させれば、僕の未来も大きく変わるだろうという野望という外観をした打算が働き、自分でも驚くほどに死ぬ程仕事をしてしまった。

僕の仕事は簡単に言えば企画屋だ。

クライアントの目的と目標と戦略を具体的に形として示し、そこに向かって進む道を作り、査定して実行し、成果をつくり出す。アイディアも重要。

コネクションと実行力も重要。勘と感が働かなくてはだめ。打ち合わせ通りプラス気配りでやりきっても、雨が降ったり電車が止まればそれまで含めてこちらの責任にされる。要求されることは、まさに神様しかできないようなことなのだ。しかも、最も重要なのは体力。

僕らは古代ギリシャ神話の中にいたら歴史に名を残したかも知れないなどと思うけれど、僕らはどちらかと言えば女が好きなので、ギリシャよりやはり東洋の神だよな、などと下らない話も笑ってしまう程のナチュラルハイ状態が、ここ数カ月続いている。

今僕が関わっている仕事は、都市再開発事業計画の中で展開される大形の商業施設のオープニングプロモーションだ。大型百貨店と専門店街、ホテル、フィットネスクラブ、エステティックサロン、美術館などの複レックス施設だ。地域振興という名のもとに法律もご都合主義で次々と改正されて、贅沢な（言い換えればまったく無駄な）つくりの建物は、良くも悪くもこの地方都市のシンボルになるだろう。

高度経済成長の頃、あらゆる犠牲を無視して工業のみを発展させたこの街は確かにその恩恵も与えられたが、伝統と歴史を破壊して来てしまったから街の偉い人たちは、豊かになった街に豊かな心を持った市民をと意味のわからないことを言い出し、様々な談合の上にこの計画を強硬に推進した。

僕の仕事は、正にその浮かれ立ったプロモート計画を現実的なものに転換するというも

ので、その具体的方策として、子供とその家族に対する本物のサービスを低コストで積み重ねていく地道な企画を、理解ある担当者と共に推進していた。片やより大げさにインパクトとクリエイティブという言葉で相変わらず踊りまくる別チームと、頭の固いトップ連中との格闘が連日続きかなり精神的にまいっていたある日、僕の提案したイベントの進行役の女性スタッフの面接があった。

本来なら、スタッフ手配担当の制作班がこの面接を行うのだが、僕の特権を行使して気分転換のつもりで面接係をやらせてもらった。

気分転換にはならなかった。企画プロデュース的にピンとくる応募者がいないどころか、判で押したような女の子が次々とやってきてニッコリ微笑む。

「私はホントなら、こんな子供向けのイベントじゃなくて大きなイベントや番組とかの仕事がしたいし、いや、出来るんだけどさ、とりあえず事務所がやっとけとかいうし、バイトだし」って考えてるだろうという苛立ちが僕の気分を最悪なものにしていった。

普段の精神状態ならもっと割り切るかそれでも何かしら楽しい方向へ持っていったとおもう。僕は楽しい方へ持っていくことについては、才能があると自負している。

「ハンプティダンプティとフェルセンセいの2人が君にキスしたい場合、君は何秒ぐらいで決心出来る？」

「僕はマチスが好きなんだけどさ。ダンスって絵の中のどの女性の裸が君の裸に近いのかな？」

「生牡蠣であたった時は仕事に穴空けても大丈夫。○か×か？」

「そこにいるヒゲのADと寝たら合格にしてもいいよ。どうする？」

こんな質問を腹の中で繰り返し、僕は眠気と闘い始めた。

なんでこんなにたくさんの“自称”経験者の女の子たちがオーディションに集まって来たのかと言えば、ここしばらく全国でアホみたいに開催された博覧会で、多少見てくれの良い女の子たちはこぞってコンパニオンになったわけで、その嵐が通り過ぎた後には、たくさんの瓦礫が散らかって残ってしまった。

こんな皮肉しか出て来ない程苛立って来た。

12人ほどの面接を終え、そろそろ限界かな、適当なこと言って後は部下に任せてコーヒーでも飲みにいこうかな、こんな時間を過ごすなら仮病でも使って今日は休んじゃえばよかったと思った時、彼女がドアを開けて現われた。

「えっと、島崎啓子さん？ あっいいよりリラックスして。」

これが僕と彼女との出会いだった。

年齢は22才。OLをしていると彼女は自己紹介の時に言った。

このようなオーディションに応募するのは初めてだそうだ。他の女の子と決定的に違ったのは、彼女がものすごく緊張していて、初々しかった事だ。

「人前で何か表現したり演じたりしたことはあるの？」

「何もありません。歌を少しだけ。」

「え？何かバンドとか？」

「いえ。そういうのじゃないんですけど。」

「どんな歌？」

「いつか、聞かせます。」

この一言でさっきまでの苛立ちがきれいさっぱりと消え去った。

身長160cmの彼女はきっと骨格がしっかりしているのだろう。そのデータ以上に長身に見えた。初夏という頃をわずかに過ぎた季節にふさわしい色合のヘンリーネックTを彼女は着ていた。

僕の心のはじっこを彼女の何かが引っ掛けた感じがして、質疑応答のやりとりが他の子より少し長くなってしまったが、それまでの僕のだれた態度から意識的に変えなかったことで周囲のスタッフには僕の心の微妙な変化を気づかれずに済んだ。

その事が僕のささやかな企みの後押しをしたのだ。

僕は彼女を選んだ。適性があったわけではない。いわば素人だ。

それを押した僕も僕だったが、実はすんなり決まってしまった。チームの連中は僕との仕事を通して、物事を判断する際の直感が皆似てきた事もある。

もっとも、この日のオーディションで彼女以外を選ぶヤツはカス以下だ。そのくらい低レベルのオーディションだった。（こんなもんだ、実際は）

結果、彼女は店舗のオープンから半年間の様々なプログラムにおいて、司会進行やプロモーション展開の顔としての役割を勤めることになった。

その為のレスンプログラムはかなりハードなものだったが、皆で素人を推した手前、彼女をプロらしく仕上げていく作業には全員協力的だった。

最近はこのようなイベント需要は大変多く猫も杓子も、やれコンパニオンだのMC（実はMaster of Ceremonyの略であることすら知らないヤツがいまだに多いが、司会者のことだ。）だのナレーターだのキャンペーンガールだのが有象無象に存在し、ランク・レベルを問わずもてはやされていた頃であり、彼女達や彼女達を有するプロダクションや代理店は栄華を極めていたし、まあ、今どき栄枯盛衰という言葉を知っているヤツも少ないけれど。

今だから正直に言えば、僕は彼女に対して恥ずかしい程に恋心を抱いてしまい、周囲に対しては逆にあからさまな態度を取ってカモフラージュした。

これだって今思えば、いい大人が取る行動ではないが僕らの業界はとにかくどこか大人の恥が欠落している人間が多く、僕はその最たるものだったし、それは30代になった今もたいして変わっていないと思う。

翌週から、彼女を交えての打ち合わせや、リハーサルが開始された。OLだった彼女のスケジュールを最初の頃こそ優先していたが、施設のオープンが近づくに連れ、チーム全体のテンションはいやが上にも盛り上がり、彼女のスケジュールに合わせるだけではダメなんじゃないか、という空気が全体を支配し始めた。彼女もそれを察してか、オープン2週間前に辞表を出してしまった。

僕としては彼女の思いも察しつつ、思いとどまるよう言ったが、それはポーズに過ぎない。徹夜続き、議論続き、頓挫、対策対応で奔走する中で、彼女は（とても陳腐で恥ずかしい表現だが）一服の清涼剤だった。

これで昼夜を問わず、呼び出すことも出来る、などと考えていた。

チームは途中何度も空中分解をしそうになりつつ、なんとかオープン前日に漕ぎ着けた。最終チェックを済ませ、僕は右の手首にはめた時計を見た。

スイスが国の経済振興を目論み起こしたスウォッチ集めが当時の僕の趣味という名の発散行為だった。余談だが、僕は腕時計を右の手首につけている。

高校2年生の時だった。その頃どうしても気になって気になってしかたがなかった女の子に思いきって告白をして、最初のデートの時、僕は彼女に何かで僕という男をより印象づけさせようと、何か仕掛けを作れないかとあれこれ考え、待ち合わせ場所に到着してから、その子が現れるまでの数分前に何げなくずっと左手首に付けていた時計を右手首に移し変えた。

最初だけ少し違和感があったが、すぐに慣れて、それからずっと右手首が僕の腕時計の住処になった。

徹夜続きで目の裏側に何か薄い皮が張り付いたような感じが、なんとなく心地よさに変わっていく中で、僕は右手首のスウォッチを見た。その日はスイス建国700年を記念してリリースされた青と銀のモデルだった。

午後11時を少し回った頃だったと記憶している。

彼女は明日朝の5時45分に家を出て電車に乗る。そして7時にこの施設の従業員通用口を通った開店準備室に集合となっているから、今頃明日の準備を終えてシャワーを使っている頃か、でも、先ほどまで最終のリハーサルで一緒だったんだ。まだ、着替えや準備物を集めて部屋でおおわらわかもしれない。

僕は彼女の事をあれこれ想像していた。

多分日常の状態の僕であれば（そして僕の性格からすれば）行動に移す事はなかったと今でも思うのだが、僕はデスクの上でファイルの下敷きになっていた電話を引き寄せ、彼女の自宅の電話番号を押した。覚えてしまった。

何回目のコールだったかは忘れたけれど、彼女が受話器を取った。

いよいよだね。準備はOK？寝坊すんなよ。などと適当な事を言う僕。

まだそこにいるんですか？大変ですね。がんばりましょうね。という彼女。

僕の毒のある冗談に会った当初は戸惑っていた彼女も、すっかり慣れて適当に相づちを打ったり聞き流したりできるようになって、僕はとても落ち着いていった。足の指の先の方がジーンと痺れてきた。妙に心地よい。

じゃ、あしたよろしく。と言った後、とっさに僕は妙に真面目ぶって「明日のオープンが成功したらデートしよう。」と言ってしまった。

そのあと、笑うか冗談だよというべきか、迷っていると彼女が静かに

「はい。・・・。」

「ホント？」

さすがにこれはマヌケだなと思ったが、思わず嬉しくて声として出てしまった。

「はい。」彼女はもう一度繰り返した。

最初の「はい」のあと、小声で何か言ったようだったが、聞き取れなかったし、そんなことより、OKという意味の「はい」に一瞬で舞い上がった僕には小声の一言はどうでもよかった。

こうなったら、年が少し離れた不器用な男に徹したほうが楽だ。

「すげえ！ほんとかよ？こりゃ楽しみだ。よーし、がんばるぞー。」

その後はごく一般的なやりとりをして電話を切った。

あの時の彼女の小声の一言にもっと注意を払っておけば。

何度も繰り返すが、当時の僕は相当疲労が溜まっていたし、わずかにトランス状態に陥っていたので、そこから一気に盛り上がっていった。結局明け方に数分間うたた寝をして若いアシスタントディレクターに起こされ、異常なテンションでオープンの様々な仕掛けをやり終え、乗り切った。

彼女はスタッフの誰もが驚く程のポテンシャルを発揮して、本当に一同が驚いてしまった。パーフェクトだった。

午後8時、初日の戦場のような現場が終了した。

彼女が控え室に戻ってきて、仕事の時より1オクターブ低いウィスパーヴォイスで、お疲れ様でした。と言った。

このとき、僕がその日初めて笑った顔を見せたと、あとで彼女に言われたことがある。それほど表情とは人の記憶に残るものだと学んだ。

お疲れさま、あれは笑ったよな、とか、明日の件だけどさ、とか。ブラックコーヒーとタバコと交互に、彼女とやりあった。

「そうだ、ゆうべさ、デートって言ったら、はいつて言ったじゃない。あれさ、いつにしようか？」と確認の意味を隠しつつ振った僕。

「じゃあ、来月の最初の月曜日なんてどうですか？」

「でもさ、この企画来月の日曜まででショ。次の日起きれっかな・・だって、それまでお互い休みなしだぜ。」

「その日じゃなきゃ、だめですよ。」

「だめなの？じゃ、その日に決定だ。よーし、絶対だぜ。」

当時の僕は彼女が電話で言った言葉と、どちらかと言えば受け身な彼女がなぜこの時はっきりとデートの日を指定したのか、そんな事を思慮深く考えたりは出来なかった。

あの時、ほんの少しでも、僕がそれらを気にしていればとエスプレッソが運ばれてくる間、僕はあれから8年経った現在、8才歳を重ねた彼女を前に考えるともなく思った。

大成功のオープン初日から一夜明けた。夜中にわずかに通り雨が降ったが今日も前日同様の快晴だった。

さすがに二日目は昨日までの緊張が少し緩んだせいもあって、スタッフの何人かが遅刻した。僕も今朝は寝過ごした。

駅の改札口を出て巨大な商業施設へ向かうアーケードで、部下の一人が後ろから声をかけて来た。

「おはようございます。柴山さん、また遅刻ッスか？」

「うっせえな、おめえもだろ。今日ギャラ無しな。」

「ちょっと勘弁して下さいよ。もう何日も寝てないんスから、ねっ。」

「だめだね。俺なんかさあ、お前ぐらいの時もう2週間寝なくて それでも300キロぐらいで機材車運転してさ、本番終わってからもさ、タコプロデューサーのくだらねえ打ち上げに付き合ってさ。お前なあ、お前なんかもう世間に顔向けできない位楽させてンじゃねえかよ。てめ、タバコとかその辺に捨てるんじゃないっての。ちえって顔すんな。このばかオトコ。」

彼は柳沢という。23才になったばかりのアシスタント・ディレクターだ。

その軽さが今一つ信用の置けない所ではあるが、感性的に僕と合う部分が多く、実は義理と人情を大切に出来る今時珍しい男だったことも手伝って僕の仕事のほとんどでアシスタントをさせている。

柳沢は14才の時まで韓国にいた。生まれと育ちは日本の長野県なのだが、どんな経緯で韓国に行ったのか、正確には知らない。その話になると柳沢は毎回ストーリーが変わってしまうからだ。

ウチに来た当初は、父親に何か事情があって、弟を親戚に預けて、自分と母親と父親の三人だけで韓国に行ったというのが彼のストーリーだった。

最新のストーリーでは、生き別れだと思っていた五才上のお姉さんを探しに母親と二人で2年間韓国に住みながら探していたと言うものだ。

普通の大人なら（いや、子供でも）そんな話信じないところだが、信じ込むヤツもたくさんいて、確かに柳沢の話を聞くと、彼独特の語りに、時に涙を流してしまうイイ年をした大人もいる。僕は、それが面白くて、柳沢のでたらめなストーリーを黙認している。全部が全部でたらめでもないらしいが。

「そのほかオトコってのだけ、やめてくれませんか？

あっ、そうそう、啓子ちゃん、昨日良かったっすよね。いや、最初ホラ柴山さん彼女で決めちゃった時、結構みんなブーイングだったじゃないすか。オレもどっちかつうと、玲子ちゃんのほうがよかったとか思ったからさ。ほら、忘れちゃいました？一人いたじゃないすか。もうパンツ丸見えーみたいな短けえスカートの娘。玲子ちゃん。ね？

でも、やるじゃないっすか、啓子ちゃん。さすが柴山さん演出ですよ。

ついてきたよな彼女。結構厳しかったっすもんね、最初は。

よく、最初彼女の才能見抜きましたね。なんか特別な判断の基準ってあるんすか？柴山さんには。」

歌を、歌をいつか聞かせてくれるという事で、なんて言えない。

「おまえ、だから、そんなところにカン捨てるなっての。」

「いちいち・・・細かいっす！ってば。」

「お前ねえ、これからは地球に優しい人間じゃないとだめなの。」

「エコロジーですか・・・あの心理テストみたいなもの。俺嫌いですよ。」

「だからばかオトコなんだよ。次の仕事お前に全部やらすぞ、てめ。」

こんなやりとりが、実は面白くて好きなのだが。

僕らは通用口にやっと到着した。結局20分の遅刻だ。

「ほんとっすか？じゃ玲子ちゃん使っていいっすか？

あっ、そんなことじゃなくって、柴山さん昨日帰る時に知ってます？彼女朝来た時と全然違う服だったの。俺ちょっと意外だったな。あれ、絶対デートっすよ。ちくしょー、いいなあ彼女もいいな。」

通用口でサインする手が少し震えているような気がして、かっこ悪いなと思いつつ平静を装っていたが、柳沢のとりとめのない話を適当に受け流しながらも、その続きが聞きた

くて、他のスタッフに遅刻の弁解と、とりあえずの段取り指事を済ませて、柳沢を誘って社員食堂へベンダーのコーヒーを飲みに行った。

「おまえ、見間違いじゃないの？昨日彼女朝、緑色っぽいポロだったろ。」

「そうっすよね。ポロでしたよね。でね、帰りに俺が見た時は、なんかこう青みtainな、紫みtainな割とカラダのラインがハッキリしたワンピースでしたからさ、俺ちょっとドキドキしちゃったもん。あれ？啓子ちゃんって結構いいもの持ってるんすよね。」

「ったく、見たことねえくせに。」

「見ました。ってゆうか、やった。痛テ・・・また殴るんだ。」

「だから、同じチームのスタッフのネタでやったとかやるとかは言うなって、おめ、何回言やわかるんだ。デパガとかホテルのクロークの女にしとけ。」

「すみません。でも、あれ、絶対デートですって。」

「絶対啓子だったのか？」

「絶対ですって。俺こう見えても人の顔絶対忘れないし、人間違いもしないですって。」

確かに柳沢の、それは特技と言える能力であり、そのお陰で仕事が前に進んだ事も一度や二度ではなかった。

「あっ柴山さん、そろそろ彼女、啓子ちゃん来る頃ですよ。行きます？」

「そうだな。で、柳沢、今の話、あんましみんなに話すなよ。今の仕事とは関係ないことだし、今変な噂とか、ホラ他の子とか結構啓子を灼いてるのもいるからさ、黙ってるよ。わかったな。」

もちろん僕が柳沢に口止めした理由はそれだけじゃなかった。
今流し込んだブラックコーヒーしか入っていない僕の胃の底の方が震えている感覚に少しだけ苛立った。

「OKですって、今日の昼までは・・・痛テ。殴るんすか？冗談ですって。」

「・・・行くぞ。」

啓子は2日目もパーフェクトだった。

午後の3時を少し過ぎて、僕はこの日も遅めの昼食をとりに隣接するホテルのコーヒーショップに向かうところだった。現場では僕の食事も用意されていたが、せめてこの時間は現場から離れて一人でいたかった。

バックヤードのエレベーターホールでタバコに火をつけた時、啓子が休憩を終えてスタッフルームから出て来た。

何か声をかけなきゃと、なぜか焦る僕に彼女は小さくしかし、はっきりとした口調で、絶妙の優しさとともに

「デートは来月の最初の月曜日って言うか次の月曜です。覚えてますか？」

と聞いて来た。その潤った大きめの目で見据えられた気がした。

「もちろんさ。それだけを支えに俺なんか、今立ってられるもん。」

こう言うのが、その時の啓子の複雑な雰囲気の前にして、その上今朝の柳沢の話聞いた上での僕の精一杯だった。

「よかった。覚えていてくれたんですね。」

「当たり前。よし、あっもう本番だろ。じゃ、次もがんばってくれ。」

「はい。」

ぞくっとした。

最初に電話でデートに誘った時の啓子の返事「はい。」というのと同じだった。それが一瞬に思い出された。（ちょっと休まなきゃな、と思った）

とにかく、もう一本タバコに火をつけて、僕はホテルのコーヒーショップへ歩いた。疲れていた。だから、見間違いだと思った。啓子がホテルの展望エレベーターに乗り込んで行ったのが見えた。

啓子はその時現場で本番の最中だ。しかもついさっき、会ったばかりじゃないか。着ているものも全然違うし、今エレベーターに乗った女性は紫のタイトなワンピースだ。柳沢の話しが気になっているだけだと気を紛らわせた。

コーヒーショップのウエイトレスが電話がかかっている事を客に告げるため大きな声で名前を言いながら、テーブルの間を歩いていた。

僕の名だった。

「あ、柴山です。」

現場のディレクターからだった。

「柴山さん、今いいですか？すぐこっちこれます？」

「どうしたの？」

「柳沢が刺されて・・・。」

「なんで？なんだよ刺されたって？えっ？わかんねえよ。今行く、うん3分くらい。いやすぐ行く。で、連絡したのか？うん、店長に直じゃなくて、担当通せよ。うん、わかった。だいじょうぶか柳沢は。うん、じゃ。」

（なんだってんだ。どうなってんだ。）

この時のコーヒーとタバコのまずさはずっと忘れないだろう。

僕は相当疲れていた。だから、ちょっとした事に対する注意力や思考力が普段より落ちていたのは確実で、ホテルのエレベーターで見た女が誰なのかわかったのは、柳沢が数日後再び何者かに刺され、生死の境を彷徨うことになってからだった。

あれから4年。再会した島崎啓子は、エスプレッソで満たされたディミタスカップから静かに立ち上る湯気の向こう側で、かつてと同じように、いつも少し潤んでいるその個性的な瞳でこちらを静かに見ている。

僕は最近視力が少し落ちた。

「柳沢さん、お元気ですか？」

僕はどう答えてよいのかわからなくて、妙な間を作ってしまった。

(柳沢の事知らないのか？それとも、何かの冗談のつもりなのか？)

「元気だよ。」

ばかな答え方をしたと強烈に後悔した瞬間、啓子は、無垢な笑みを見せた。

第2章 Devil gate drive

天気予報が当たった。

「今日は午前中は曇り所により一時小雨が降るでしょう。
午後は次第に雨も上がり晴れ間が差す所もあるでしょう」

天気予報というのはどうしてこうも歯切れが悪く、人をおちよくったような言い回しなのだろう、と柳沢 衛は起きがけに聴いていたFMのことを思い出しながら、目的地に向かって二代古くなった赤い国産FRクーペを走らせていた。

柳沢はイベント企画会社でディレクターをやっている。一週間後に誕生日がくると23才になる。彼は業界でのキャリアは長いほうじゃない。

学生の時から国内外のあちこちを転々として、ある事件がきっかけで 現在の彼の直属の上司と出会い、その会社に籍を置くようになった。

最初はアルバイト、次いで契約社員、そして現在は正社員となったのだが柳沢の努力と根性は今でも語り草になっている。要するに、負けん気の強い若僧が自らの失敗が原因でトラブルを起こし、それを鎮静して彼を救ったのが現在の彼の上司である柴山だった。

柳沢は柴山の厚意とその際の骨折りに報いるためと、今までの人生をふりだしに戻し、自立するために、それこそ文字どおり不眠不休で働いた。だから一般的に3年くらいかけて身に付ける経験と実績を柳沢は最初の1年で自分のものとしてしまった。

そんな柳沢を上司の柴山は弟分としてかわいがり、新しい仕事の時は常に傍らに置くようになって、以来、柳沢もそれに応えてきた。

彼等はこの三か月というもの、まともに休みをとっていない。

地方都市の駅前整備と再開発計画に内包されたステーションビルとショッピングモールのオープニングに関わる様々な仕掛けやイベントを彼等の会社が受注したことで、担当である柴山とアシスタントの柳沢、そしてチームは周囲が気の毒がるほどの状況に追い込まれて行った。

「やってられっか!」「ざけんな!」「ぶっころすぞ、てめえ!」という怒号や会議の最中の泣き声がなんど聞かれたことだろう。しかし、チームは根はみんなこの仕事が好きで好きで仕方がなく、またお互いの事を尊敬できるという連中だったという幸運で数々の障壁を取り除いてきた。

あとは現場をいかに成功させるかだけだ。ここまでくれば明るくノリ一発で楽しく推進させていけばよい。勿論細心の注意を払ってチェックしていく役がいなくてはならないが、このチームには口数は少ないが誰よりもしたたかで直感力がずばぬけた水野多恵子というスタッフがいたお陰で、ミスは最小限にとどめられていた。

水野多恵子は24才で主にデスクを担当している。営業、企画、デザイン、制作、スタッフのシフト、雑務に至るまで実に多種多様な業務流通がある中彼女は要領良く確実に事を進めていく。

時にはチーフである柴山やその上に端的に理路整然と問題点を提示し、その場で明快な返答を求めたりもするのだが、角が立ったことはない。

多恵子は中学高校と水泳部のキャプテンを勤め大学生のときはスポーツクラブでインストラクターのバイトをしていた。

ちょうどその頃、柴山が手がけた百貨店のファッションショーでプロのモデルではなく、フィットネスクラブのインストラクターをモデルに起用してのスポーツウェアショーが企画され、出演を打診したクラブに多恵子は所属していた。

普段の格好のときやジャージを着ているときは、どことなく地味でむしろどことなく暗い印象があって、柴山はどのシーンで多恵子を使うかを迷ったと、後に柳沢に話したことがある。

「水野さんって、柴山さんがスカウトしたんですよね。ショーかなんかで使って。」

「地味だったなあ、多恵子は。最初見たときさ。」

「今でも地味じゃないっすか。でもなんか、変身するんでしょ、彼女」

「変身って、うん、まあ、変身だなありゃ」

「やっぱ変身の時って、服ビリビリになってクルっとか回ってみたいな」

「そうそう、ピカピカって光って、すっ裸。いけね、思いだしちゃった」

「ねえ、ホントはどんなでした？」

「だから、今言ったじゃん。すっ裸。スッポンポン」

「で、どうでした水野さんの裸？」

「教えるか、おめなんかに」

「えっ？ほんとにみたんすか？なわけないっすよね」

「おまえさ、ほんとにアホなのかどうか、時々わかんなくなんだよな。」

当時のファッションショー企画がある程度形になった頃、出演者とスタッフを集めて振り付けとリハーサルが行われるクラブのフィットネススタジオに簡単な音響器材とテーブルや備品が運び込まれて、それは最小限の物量だったけれど、本職はモデルではないインストラクターたちにとってはなんとなくものものしい雰囲気だったようで、スタジオには緊張感が張りつめていた。

「じゃ、最初は皆さんもリラックスして、ちょっと音楽ながしますから、適当に曲に合わせてカラダ動かしてみてもらえますか？皆さんの動きも知りたいんで、そんで演出プラン練っていきますから。」

柴山の合図でスタジオ内に軽快なビートが響き始めた。8小節ほど曲が進んだとき、その場にいた（インストラクターたちを除く）スタッフ全員が息を飲んだ。

当然柴山もだった。あの地味などこか陰気な感じさえあった多恵子がフロアのセンターに躍り出たかと思うと、スタジオ内の空気を一変させてしまうほどの、なんというか生命

力の塊が暴れ出したかのようなダンスを始めたのだ。肢体は緊張感を備えていながらもしなやかに伸び、手足はその指先までも原生林の雑草が林間を吹き抜ける風にそよぐようになびき、瞳は強い意思を示し、鼻筋から口元にかけては何者をも彼女の肉体の内側から湧き出る、ある種の喜びの唯一のはけ口であるかのごとく感情を発散していた。首がちょうど隠れる長さのストレートの髪さえ自分自身の意思でコントロールしているのではとさえ思わせられた。

水野多恵子が放つ強烈な生命力に柴山はぐいぐいと引き込まれ魅せられた。それまで準備してきた演出プランを破り捨て、白紙から再スタートさせようかとさえ考えたが、それはグッと飲み込んだ。確かに水野多恵子は素晴らしい何かを持っていると思う。

しかし、これはあくまでも百貨店の中で公開される素人向けのイベントだ。それに多恵子の表現力と技術は決して優れているものでないしこれから舞台の演劇を構築していくのならいざしらず、自分はイベントプランナー、舞台の演出家じゃないんだ、この凄さを俺の自己満足でステージにあげたって、誰も喜ばないだろうし、きっと求められている明るい躍動感とは程遠いステージになってしまうだろう。

「はい、ありがとう！音サンキュウ、止めてください。」

3分ほどして柴山は音を止めた。

「じゃ、今から今回の構成と演出プランを説明します。

あっ、休みながらでいいですよ。

最初はジャズダンスでレオタード、次にテニスウェア、ゴルフときて、もう一回レオタード。この時はウォームアップスーツも出してマシントレーニング、あの自転車漕ぐやつとか、で競泳用の水着ときて最後に各種勢ぞろいとなります。スタイリストがあとで着るもの見せますんでよろしくをお願いします。」

途中、休憩やスタッフのジョークも交えながら、リハーサルは順調に進んだ。この間、誰も気にしていなかったのだが多恵子が極自然にスタッフ側の作業を手伝い、それが全体の進行をよりスムーズにしていっていった。

「水野さんて、こういう裏方みたいな事に興味あるの？」

「興味ってゆうか、私、あんまり表にでたい気持ないんですよ。」

「でもさ、いいもん持ってるとおもうぜ。磨けば光ると思うよ。」

「ありがとうございます。じゃ、磨いてくれますか？」

柴山はこの時 少しドキっとしたに違いないと、話を聞きながら柳沢は思った。意外と不器用なところがある柴山を柳沢は信用していたし、そんな柴山だから素直に従っているのだとも言える。

「とにかく、多恵子は化けたんだ。あのリハの時な。

でも、ショーではセンターには置かなかった。うん、無難にこなしたよ。努力もしたからさ、彼女。」

「で、アルバイトで誘って、彼女がそれに応えたってことですね。

ふ〜ん、見たかったなあ、水野さんのダンスってゆうか変身。」

「すごかったんだから、あれで結構きれいなラインなんだよ、カラダ」

「柴山さん、見たんすよね、レオタードの彼女」

「見たってゆうか、やった」

「マジっすか？」

「ウソだよ、ばかやろう。俺は商品には手を出さないし、これはホント」

柳沢は、今車のなかで信号が赤から青に変わるのを見ながら、柴山のジョークをいつの間にかマネして 持ちネタ的に使っている自分に苦笑した。古着屋で見つけたボウリングシャツの胸ポケットからタバコを1本取り出すと口にくわえてシガーライターを押し込んでから灰皿を開けた。瞬間ムツとしたヤニ臭さが車内に広がり、あわてて手回しでウィンドウを開けた。

柳沢は今日、柴山たちと一緒に会場の施工打ち合わせがセッティングされていたのだが、2日前に今日は休んでよいということを柴山から告げられた。

「おまえ、あさってオフな。」

「えっ？また、なわけないじゃないっすか、どうやったら休めるんすか？」

「いいって、あさっての打ち合わせなんかなくなたって、それよっかおまえここで休んどかねえと、ホントこの先もたねえぞ。俺も休むから、な。」

「じゃ、マジいいんすね。休みありがとうございます。」

柳沢は少し拍子抜けしたが、確かに今無理してでも休まないと、ぶっ壊れると思ったし、柴山こそ休ませないとも思った。柴山は部下を差し置いて先に休むことが絶対に出来ない男だし、とりあえず自分が休んでチームのスタッフを順番に休ませようと考えてオフを受け入れた。さて、何をしよう・・・

柳沢は今、目的地に向かって二代古くなった赤い国産FRクーペを走らせている。

オートマチックを拒み、2ドアの赤いボディカラーで、しかも駆動方式はFRということにこだわって、その上さらに限られた予算で中古車ディーラーをしらみつぶしに当たりとうとう手にいれた自分のクルマ。

直線的なウェッジシェイプのハッチバックでエアコンとカーステが付き、なんと言ってもドアミラーになっていたことが購入決定の大きな決め手となった。車の中を禁煙にしているドライバーが増える中、柳沢はお構いなしだった。なんたって大好きな映画の主人公は、オープンカーで荒野を疾走し、クールを2本一度にくわえて火をつけていた。

ヘビ皮のジャケットを着て、渋滞のハイウェイの車の上でプレスリーの歌を歌っていた。オープンカーではないけれど、2本一度はきついから一本ずつだけど、ヘビ皮のジャ

ケットなんか欲しくもないけれど、何度も見た映画の主人公になった気分で、柳沢はハンドルを握りアクセルを踏んでいた。（水野さん、タバコを吸わないけど、別に嫌煙家じゃなかったよな）

昨日の朝、会社でミーティングが終わり、資料やマグカップを片付けている時に柳沢は水野多恵子をデートに誘った。

二人一緒に休めないでしようと言ったが、柴山の心中を柴山がとても優しい上司だといわんばかりに大げさに話して聞かせ（イヤだとは言わずに休みのことを持ち出したということは）とも考えつつ、柴山にはうまく言っとくからと、水野多恵子をまんまと誘う事に成功したのだ。

柴山はあっさりとOKしてくれたので、柳沢は拍子抜けした。柳沢の興味は以前に柴山から聞いた水野多恵子の変身が対象であり、さらに若い柳沢にとってはレオタードがパワードのようになっていて、水野＝変身＝レオタードと安物の美少女ヒロインのようなイメージがふくらみ、でも一方では普段の職場で冷静にてきぱきと仕事を進める彼女に対する大人の女性的イメージがクロスして、彼女に対する興味は妄想に近くなっていた。

水野多恵子はJR線の駅近くにある外車のショールーム前を待ち合わせ場所に指定した。柳沢はその場所に到着し、三車線ある道路の左側にハザードランプを点灯させながら停車させた。

約束の時間まで5～6分あった。車外へ出てタバコに火をつけた。時々雨粒がポツッと落ちてくるようだが、本格的に降る気配はなかった。さてと、まずランチかな、今日は先輩とか年上とか思うのはやめて、最初っからタメ口でいこうかな、と考えていると、駅からの地下通路出口から水野多恵子が現われたのだが柳沢はまったく気付かなかった。

多恵子は普段は履き慣れたリーバイスにコンバースオールスター、トップはスウェットシャツかロックバンドのロゴがプリントされたTシャツという格好をしているが、今日はスカートだった。

柳沢の記憶の中にスカートを履いた多恵子は存在していない。不思議な、しかし落ち着いた感じの模様があしらわれ着心地のよさそうなシャツを多恵子は着ていた。

横断歩道を渡りながらこちらに向かって手を振り小走りにやってくる女性が水野多恵子だと気付いた柳沢は少し照れて、その為ニヤけてしまって、それに気付いて妙に恥ずかしくなってしまう、うつむいた。この時、なぜかタバコをやめようかと、実際には禁煙なんかこれっぽっちもする気がなくせに彼は思った。子どもじみた自分なりのダンディズムの象徴であるタバコが目の前に立った“生成り”という表現がぴったりにくる爽やかな女性の笑顔の前では汚らしいものに思えたからだ。

「おはよう、待った？」

「おはよう・・・ございます・・・いや、今着きました。」

「雨振りそうだったけど、天気予報も大丈夫みたいな感じだったから傘もってこなかったんだ。柳沢君車だって言ってたし。」

「そうっすね（何緊張してんだ）」

「どうする？」

「いや、あの、とりあえず乗って下さい。どっかランチでも食べに。」

「え？おいしいとこ連れてってくれるの？楽しみにしていい？」

（水野さん？こんな明るい人だっけ？これって変身なのか？）

「今日、なんか普段と全然感じ違うなあ、水野さん（さんって）」

「そう？いつもどんな感じ？暗い？固い？笑わない？他には？」

「いや・・・。」苦笑するしかなかった。

「いいね、この赤。スポーツカーって感じで、柳沢君似合ってるよ。」

「あっ、うれしいっす。いいでしょ。安かった中古だけど、そうだ、水野さん（さんって）あの、シーフードどうですか？」

「いいね、じゃ、お任せします。」

シートベルトをしめて、イグニッションキーを回しエンジンを始動させると柳沢は後続車の途切れたのを確認して走り出した。いつもと違う多恵子を前に緊張している自分と、車内の空気を変えたい気持ちが整理できずにまっすぐに車を走らせた。

このまま進むといずれは東名高速道路の入り口だ。考えがまとまらないまま、柳沢の車は高速道路のゲートをくぐり、加速しつつ本線へ合流して東へ向かって時速100kmを超えた。先ほどから多恵子は内装やスイッチ類について質問してはその答えに感心したりしている。何か話題を振らなくてはと思った柳沢は何気なく切り出した。

「水野さんて変身すると凄いんですってね」

極自然に特別な話題という印象にならないように切り出せたことを柳沢は自分でも上出来だと思った。

「柴山さん？昔わたしが水泳やってた頃の話し？」

ああ、もう柳沢君にしゃべっちゃったんだ。ね、他の人には絶対言わないでね。」

柳沢は少し混乱した（えっ？水泳って中学か高校のときだろ？柴山さんて水野さんの事、そんな以前から知ってたのか？ダンスのリハの話じゃないのか？）

「えっ、ええ、（くそ、なんなんだ、どんな話しなんだ）でも、なんで人にしゃべっちゃいけないんですか？カッコいい話しじゃないんですか？」

カマをかけるつもりではなかったが、多恵子は前方を見ながら少し笑いつつも

「ぜんぜん、どこがカッコいいもんですか。ああ、思い出したら恥ずかしくなってきた。ねえ、どこまで聞いているの？」

「いえ、あの僕が柴山さんから聞いたのは、ファッションショーのリハの時の話して、それ以前のこともなんか聞いたことないですよ。」

「えっ？ そうなの？ やだ、もうてっきり……。柴山さん大げさに話すから」

柳沢は少し黙った後、思いきって切り出した。

「水野さん、今から浜名湖へ行こうと思ってるんです。1時間くらいかかるから、よかったら、いやホントいやじゃなかったら、その話して下さい。だめですか？」

多恵子は苦笑いとも微笑ともとれない複雑な笑みをみせた後、一旦視線を左の窓の外へやって、ゆっくりと柳沢のほうへ体の向きを変え、話し始めた。

「ちょっと長くてわかりにくい話しなんだけど、いいかしら？」

「はい、どうぞ、俺、タバコ吸っていいですか？」

「いいけど、運転は気をつけてね。」

クールという名のメンソールタバコに火をつけながら柳沢は思った。

今日はもっと軽い感じの、明日からの活力になるような楽しいデートで、あわよくば、水野多恵子について根掘り葉掘り聞き出したり、更にうまくすれば、もしかしたら口説いちゃったりして、とかそういうオフじゃなかったのか？。

柴山が自分と多恵子を休ませてくれたのも、単なる厚意じゃなかったんじゃないのか？ どうして俺は曇り空の下を東にたなびく雨雲を追いかけるように高速道路を走ってるんだ？ 今から彼女が語る話しは直感だけど、笑い話しじゃなさそう。柴山さん知っているのかな？ 俺が今いるこの瞬間は 現実の世界か？

そう、この世に起こる出来事はたかが知れている。彼女が化け物か何かで、柴山さんはいかなる能力を持ったエキスパートかエージェントなんてことが例え水野多恵子の話しに出てきたとしても、そんなアニメや映画はたくさんあるし、どう見たって隣にいる彼女はエイリアンには見えない。タバコの煙を吐き出しながら、チラッと彼女を見た時目があつたとたんに、柳沢は少し落ち着いた。

赤いクーペが最初のパーキングエリアを通りすぎようとしたとき、多恵子は話はじめた。その口調はとても穏やかだった。

「わたしね、小学校4年生になるまで全身の感覚がなかったの。」

柳沢 衛は今、病院のベッドの上で、鼻と腕にチューブをつけられて横たわっている。

彼が携わっているプロジェクトのイベント初日、その会場で起こった傷害事件は、一般の来場者への被害は無く、唯一の被害者がこの若いディレクター柳沢だった。何者かに刺された傷は 幸いにして急所をわずかに外れていたが、出血が相当量だったのでイベント会期終了まで意識不明になっていた。

（今ごろ、現場、撤収やってんのかな？）などと考えていると、付き添いの女性が病室に入ってきた。柳沢と同じく柴山のスタッフである水野多恵子だ。

「どう？気分は」

「気持ちいいよ。全身マヒしてんだ、痛みとかさ、感じないんだ。昔の君も、こんなだったのかな？」

「ほら、もう少し眠ったら」

柳沢は、約1か月前に目の前にいる水野多恵子から信じられないような話を彼女との初デートの日に聞かされた。その後彼等は公私共に良きパートナーになった。

今はスタッフ全員が黙認している。彼等はケジメがあったからだ。

包帯の巻かれた左手を多恵子にやさしく握りられながら、柳沢の意識は 眠りという穴の中へ吸い込まれていった。

そして遠のく意識の中で、彼は初めてのデートの時に多恵子が語った彼女自身のストーリーをなぞっていった。

「全身の感覚がまったく無いってどんな感じだと思う？」

第3章 Heavy Weather

「今日かけたレコードは、僕が今年上半期に出会ったアメリカン・ブラックのR & Bと呼ばれる、つまりはアメリカ黒人の流行歌のなかで、特に愛聴した12曲を紹介してみました。今年はここ数年の中でも特に豊作でしたね。」

オーディオルームのFMチューナーのプリセットチャンネルを適当に合わせていたプログラムで、担当DJがお喋りをしているが、それを真剣に聴いているヤツはこの部屋にはいない。

雨上がりの深夜、片側5車線の国道を時折、大型のトラックが通り、水飛沫の音が聞こえるが、それと壁の時計が発する秒針の音が同じくらいの音量に感じられてしまう。日付はとっくに変わっている。あと1時間もすれば平和な夜明けを演出すべく、小鳥が鳴き、朝日がさして、新聞配達のアートバイクが元気に走ってくることだろう。

柴山はモニターに向かってキーボードを叩き続けていたが、ついに目標に達したらしく、小声で、よし、と言うとプリントアウトを始めた。

「できました？」

柴山の部下の柳沢が、ヘッドホンをずらしながら柴山に聞いた。

「おう、新記録。」

「超遅漏新記録ですか？まあ間に合ったということで。」

「オマエなあ、飯抜きでぶっ通しで仕事をした上司を少しはおだてるよ。」

「すご〜い！柴山さんじゃなかったら、来月になってもできてなかったよな。」

「いいよもう。あれ、終わっちゃったの？ラジオ。あ〜録音しときゃよかった。」

柴山と柳沢は、イベントの台本作成と、その演出プランに沿った音楽の選曲をしていた。結局、徹夜になってしまった。

彼等は、工業都市の駅前再開発計画としてのプロジェクトに集客と宣伝、さらに長期的な顧客との信頼関係を醸成するという目的に立ったソフト面の企画と実行を担当しており、いよいよプロジェクトの中心となる大型商業施設オープンまであと一カ月と迫った今、事業を成功させるためのあらゆる準備が一気に重なり、まさに殺人的に多忙を極めている。彼等は現在、ほとんどの時間をこの仕事に費やしているのだが、一応会社組織に属しているサラリーマンという立場であるから、いくら大きな仕事だとは言え、それだけに関わっていればよいというわけではなく、だから、こうして週末の他のイベントの準備もしなくてはならない。企画会社やデザイン関係の会社というのは、決して大人数で運営されているのではないのだ。

柴山はあと数時間後に本番を迎えるステージショーの台本の変更箇所を整理して再構成したものを作り、仕上げをしているところだったのだ。

柴山のアシスタントを勤める若いディレクターの柳沢は、本来このステージショーには携わっていないのだが、自分が担当している企画の音構成の資料集めと称してオフィスに居残ったのだ。柴山の仕事だということで、気になるということも理由であるが、それより同僚の水野多恵子が帰っていないからというのが、本当のところだった。

「冷めちゃいましたけど、柴山さん、ピザありますよ。」

多恵子が柔らかな笑顔と共に、上司である柴山にデリバリーピザの残骸を示した。彼女は彼等のチームメイトであり、よきマネージャーといったポジションだ。

「柴山さんが好きなパイナップルとハムのやつですけど、コーヒー入れますね。」

「うまいよ。もう、冷めたってなんだって、水野がコーヒーまでつけてくれるんだもん。ああ、うめえ。柳沢、コンビニ行ってさ、このピザ温めてこい。」

「あっいいっす。俺食わないから、柴山さん行ってください。」

「てめ、そゆこと言っていると、ピザ食わさねえぞ。いけよ。」

「だから、食わないって、そんな甘くて変な、しかも冷めたピザ。」

「変じゃねえって、なあ水野、やっぱピザはこれだよな。」

「うん、わたしも好きだけどな。パインとハム。チーズと合うよ。」

多恵子は、柴山にマグカップを渡した。柴山は、彼の部下たちが好きだった。

彼等の仕事は、ここまでやれば終わるというものではない。

勿論、到達点はあるが、一言で言ってしまうえばキリがないということだ。

企画書も予算書も打ち合わせも完璧で、選曲や編集、デザイン、スタッフの全てが完璧で、段取りも仕込みも抜かりがないという場合でも、彼等はそれ以上を求めよく言えば妥協を許さない、仕事に対する厳しさとなるが、第三者がみたら単なる偏執狂的な作業だと写ることだろう。

確かに徹夜も多いし、特にここしばらくは、ろくに休みもとっていない。高いレベルで少くはい手を抜いたとしても、多分はばれないだろう。しかし、この仕事を何回か繰り返すうちに、手を抜けなくなる。

来場者と直接接するからだ。

そのことにいつも柴山はこだわる。

従って、彼についた部下やスタッフは、最初は貧乏くじを引いたと不平を言う。

だが、ひとつの仕事が完結する頃には、たいてい柴山に感化され、また一緒に仕事をしましょう、ということになる。

日付けが変わる時間の前後には、他にも数人のスタッフが作業や打ち合わせをしていたが、今、オフィスにいるのは彼等3人だけだった。

明け方近くのオフィスで仕事を共にしながら、こうしてバカを言い合い笑ってい

る彼等が柴山は好きだったし、こうした時間が好きだった。柳沢も多恵子もそうだったし、なにより、2人も柴山が好きだった。

「水野、もう終わってんだろ。付き合わなくてもいいぜ。眠いだろ。」

ブラックコーヒーをすすりながら柴山は多恵子に聞いた。それにしても多恵子がいれるコーヒーはインスタントでもうまい、と柴山は内心思っていた。

「あたしならだいじょうぶですよ。体力だけが取り柄みたいなもんだから。」

「いや、ほんとタフだよな。おつかれさん。あっおまえさあ、今日現場じゃなかったっけ？少しでも寝とけよ。」

「ええ、今から一回帰ります。シャワー浴びて、着替えて。」

「でも、ああ、もう寝れないな。悪かったなあ、もうちょっと早く帰せばな。」

「だいじょうぶですって、気にしなくても。それより柴山さんこそ。」

「そうっすよ。若くないんだから。」

柳沢がやっと口をはさんだという感じで割り込んだ。

「うるせえよ。おまえ、来週また一週間休み取れねえんだから、帰れる時は早く帰れよな。水野が残ってなかったら、おまえとっくに帰ってただろが。」

柴山は柳沢が多恵子に関心を持っていることを知っていた。逆に柳沢の方は、そんなことを柴山が気づいているなどとは思っていなかったらしく、少し顔を赤くして誤魔化すために外国製のメンソールタバコに火をつけた。

「とにかく、俺ももう済んだから、今日は一旦解散だ。じゃ、水野そっちもがんばれな。柳沢、おまえもう帰るだろ、送ってけ。」

「えっ、ははい、いいっすよ。」

「あっ今、水野送れると思って、一瞬喜んだだろ。ばか、水野じゃねえって、俺。

じゃ、水野気いつけてな。お疲れ。いくぞ。タバコ1本よこせ。」

「お疲れ様でした。柳沢君、お疲れさま。」

「ふつう女の子の方が心配じゃないかなあ。ったく。水野さんだいじょうぶ？」

「大丈夫だって、水野は、クルマ買ったばっかだもんなっ。じゃな。お先。」

「じゃ水野さん、おつかれさま。明日がんばってください。」

「はい。あっ柴山さん、台本。はい。」

二人の男がオフィスを出たあとで、24才の水野多恵子は、デリバリーピザの箱と丸められた紙ナプキンやマグカップを湯沸室に運び、灰皿を片付けてバッグを肩に掛けると、オフィスを見渡してエアコンのスイッチをオフにした。セキュリティーシステムを作動さ

せて照明のスイッチもオフにしてからドアの外に出て、ロックをしようとして、バッグの中のキーをまさぐった。

キーをなかなか見つけれずに、多恵子は少し苛立った。だから、バッグの底に落ちていた安全ピンの針が 彼女の右手薬指の爪の間に刺さった時もすぐに手を動かすことを止められず、従って安全ピンの針は5ミリほど深く刺さってしまった。

痛っ。指先を口に入れて、唾液で傷口を塞いだ。キーホルダーが見つかってドアをようやくロックしてエレベーターに乗り込み、夜が終わり朝になる時間に多恵子はビルから外へ出た。あくびが出た。右手の薬指が痛んだ。

（眠たくてあくびが出て、針が刺さって痛い）

あたりまえの事を多恵子はつぶやきながら、彼女のクーペに乗り込んだ。

多恵子は3才から4才になろうとしていた頃から14才になるまで全身の感覚がまったく無くなるという病気にかかっていたのだ。だから、眠たくてあくびが出たり痛くて「痛い」と声を出したりということが、あたりまえのことではなかった。

14才になって間もなくその原因不明の病気はなんの予告も無く、多恵子の身体から消えてなくなり、その後の彼女はそれまでのうっぷんを晴らすかのごとく、とにかく身体を酷使して鍛え、今では健常者の代表のような骨格と筋力と体力を維持している。このことは柴山も知らない。

多恵子の家族は幼くして身体を自由を奪われた多恵子を、最初は哀れんだのだが、発病から一年が過ぎた頃からまったく普通の家族に戻り、多恵子を特別扱いしなくなっていった。勿論出来ることと出来ないことがあったのだが、意志を持った物という扱いを絶対にしなかったし、外部に対しても何も隠さなかった。

だから、多恵子は別の病気に逃げ込む必要も無く、知識欲が旺盛な女の子として変な表現だが、元気に育った。彼女には両親と祖母、三つちがいの兄がいた。

彼等がちゃんとしていたから自分は生きているのだと、彼女は今も思っている。

針が爪の間に刺さった薬指は、先ほどにも増してジンジンと痛んでいる。蒸し暑くなりそうな初夏の日曜日の夜明け前に、クーペを走らせながら多恵子はまたあくびをした。今日はいいい日になりそうだ。と、24才の水野多恵子は思った。

「わりいな、送らせちゃって。今日おまえは昼頃会場へ入ればいいからさ。」

「はい、水野さんの方は心配ないっすよね。」

「うん、一応遠藤つけといたから、大丈夫だろ。水野さあ、あそこの部長に気に入られてるし、寝不足で化粧のノリがどうのこうのってゆうの、関係ないしさ。」

「ホントに水野さんって、いつも素っピンなんすかね？」

「そりゃ、まったくってこともないとおもうけど、あいつ肌きれいだよな。」

「見たんすか？」

「みた。ってゆうか、やった。」

「そゆこといっちゃダメですって。身内なんだから。」

「おまえさあ、水野気になってるだろ。いいよ。あの娘は。やっちゃえ。」

「やることしかないんすか？オヤジ路線ばく進中って感じっすね。柴山さんも。」

「だってオヤジだもん。」

「まんまじゃないっすか。・・・あれっ？啓子ちゃん・・・じゃないか・・・な・・・？」

「うん？だれ？」

「ほら島崎啓子。いや、こんな時間にこんなトコ歩いてるわけないか。でも似てたなあ。」

「どこだよ。」

「あの、さっきの交差点トコのコンビニの前で。」

「戻れ。」

「戻れって、柴山さん、マジっすか？もう帰らないと、間に合いませんよ。もう柴山さん、啓子ちゃんとどうなってんですか？結構みんな噂してますよ。」

で、やったんですか？痛っ！なんで叩くんすか？もう。すぐムキになって。」

「うるさいよ。やるとかやったとか言うな、ばか。プラトニックなの。僕達は。」

柳沢は吹き出した。

柴山は島崎啓子を思った。啓子は柴山達のプロジェクトのためにオーディションで選ばれたイベントのためのタレントであり、パフォーマーである。選出したのはプロデューサー兼プランナーの柴山だ。柴山の選択眼はスタッフから信頼されていたが、リハーサルを始めてからの啓子のポテンシャルの高さが、それをあらためて証明していった。事実、彼は啓子を一目見た時から個人的な関心が沸き起こり、プロジェクトが成功したらデートに誘い出そうと思っていた。

柳沢には本音を話そうかな、と柴山はさすがにぼんやりしてきた徹夜明けの頭で考えていた。

柳沢の赤いクーペの社内が静かになって、二人はタバコに火をつけた。

「でもさっきの、あれ啓子ちゃんに似てたなあ。啓子ちゃんって、明日って今日か現場でしたっけ？」

「え？ううんと、確か桜井の現場でナレーションやるんじゃないかかったっけ？現場の实地練習兼ねて。啓子の家は急行で1時間かかんだぜ、今頃起き出して顔洗ってる頃だって。他人のそら似だろ。」

「そうでうよね。知ってます？桜井のヤツ啓子ちゃん狙ってるって。」

「ああ、知ってる。来週、桜井は消す。」

「柴山さんマジだかな。やっちゃいかねないしな、そゆこと。」

「ばか、冗談だよ。それよっかさ、今日はいい日になるぜ。空見てみるよ。」

柳沢の運転する彼の国産の赤いクーペは、黄色から完全に赤になった信号を無視して東へと走っていった。助手席の柴山はうつらうつらしていた。

いつかもこんな天気の日、夜明け前、この道を走っていたような気がする。

「デジャ・ビュって知ってるか？」

以前、柴山に聞いた話を柳沢衛は思い出した。

「昔の話なんだけどさ、弟がいるんだよ、俺より2才下で、家はけっこう賤とかちゃんとしてたからさ、仲が良くてお行儀が良い兄弟だったわけだ。

で、いつも一緒に遊んでたんだけど、3才から5才くらいの子供って、全然違うじゃん、体力も知恵も。だから二人であそんでる時はいいんだけどさ、近所や幼稚園とかの友達がそこに加わると、仲の良い兄弟の兄貴は鬼のような子供に変身するわけさ。

友達とちょっと危ないこととか、身体使った遊びとかじゃんじゃんしたいのにさ、二つ下の弟はまだ幼くてついて来れないんだな。

だからさ、邪見にするわけだ。まあ、どんな兄弟でもそうだと思うけどさ。

おもちゃや道具とかも常に平等に与えられて、例えば俺が野球やり始めたとなると、とりあえずグローブを両親が調達してくれるんだ。で、弟も欲しがるとさ、オモチャのグローブを買い与える。

すると弟は一旦は喜ぶんだけどさ、やっぱオモチャだから、本物が欲しくなる。

二年経つと、弟が本物を買ってもらうだろ、当然俺は無し。お兄ちゃんだから。

嫉妬するんだよ、兄貴としては。で、余計に仲間はずれにしたり、邪魔ものにしたり、変な役割ばっかやらせたりするんだけど、弟は泣きながらでもついてくるんだ。つれてって欲しいんだよ、俺に。だからまた無理難題を吹っかけるという繰り返し。

だけど、家に帰って二人きりになったり、雨が降って外に遊びに行けないと、ほんとうに仲良く遊ぶんだ。大切な弟として俺が扱うから。

ある日、近所の家が建て直されることになって、木造の家を壊してたんだよ。

瓦礫の山は子供にとって、最高の遊び場だから、俺たちも夕方忍び込んで遊んでたんだ。俺と友達と、弟もついてきて。

探検してたんだ。でもどうしても弟が足手まとிட்டった。

狭いところへ入って、上の方に登って飛び下りて遊んでたんだけど、3巡目の時に、弟が膝をぶつけて痛がって飛ばないんだ。で、俺、みんなの手前もあるからさ、怒って後ろから押したの。そしたら、弟が下に落ちて、瓦礫やトタンが崩れてさ、あっという間で。

すぐにみんなで瓦礫をどかして、弟は泣きながらごめんなさいって俺に謝るんだ。俺も泣きながら、良かった生きててって思って、頭とか撫でてやってて、手をつないで帰ろうと思ったら、手が無いんだよ。

弟の左手の手首から先が無いんだ。

俺は自分が壊れちゃうんじゃないかってくらいに叫んだ。声が出てたかどうかともわからないくらいに叫んだ。

そしたら、夢だったんだ。

俺たち2段ベッドに寝ててさ、俺が下で弟が上だったんだけど、目が覚めてさ、涙が出てくるんだ。でも夢だったから良かったと思って、そしたら上で寝てる弟が寝返りをうって、ベッドの手すりを乗り越えて落ちそうになった。

俺はベッドから降りて、梯子を上って布団をかけてやろうとしたんだ。

寝顔を見て、その横に添えられた腕を見て、俺は声を上げながら梯子を踏み外した。

左手が無いんだ。眠っている弟の左手が無いんだよ。

そして、俺はベッドの下で両親に抱きかかえられて、泣きながら目を覚ました。

弟が心配そうに二段ベッドの上から俺を見下ろしてた。」

これがデジャ・ビュなのかどうかわからないし、デジャ・ビュがなんなのかを説明するのに適した話とは言わないけど、俺はデジャ・ビュという言葉を知ると条件反射みたいに、この話を思い出すんだ。と柴山は言っていた。

そろそろ柴山の部屋に到着する。柴山さんの左手が無かったら笑うなと、柳沢は思った。

桜井というディレクターが現場の事故で骨折したという報告が柴山の耳に届いたのはその日の夕方だった。

朝、あれほど晴天だったのに、ひどい雨が降っていた。

第4章 telephone line

「メシは？」

「まだです」

「オレもなんだ、とりあえずなんか食べよう」

「なにがいいですか？」

「そうだなあ、なんでもいいけど、ビール飲みたいし」

「近くにしましょうね。私もペコペコだし」

「うん、どっか知ってる？」

「ええと、お好み焼きってどうですか？」

「お好み焼きだけだとつらいけど」

「鉄板焼きのお店でおいしいんですけど」

「いいよ、じゃ、道教えて」

「いいですか？じゃ、次の信号を右です」

「ああ、ハラへったし、もう汗しっかりかいたから、ベタベタだ」

「今日は外だったんですか」

「うん、お客さんもたくさん来たし、とりあえず初日は成功」

「そう、よかったですね。次をまた右で、区役所の裏の道に入って下さい」

「今日は仕事だったの？」

「ええ、ほんとは休みだったんだけど、出勤になっちゃった」

「大変だな。明日は？」

「明日はお休み。明日現場ですよ」

「うん。7時集合」

「じゃあ早く寝ないと」

「まあね。でも暑かったなあ」

「私は1日中事務所の中でしたから平気でしたけど。焼けましたね」

「そうか？あっその左側の店？」

「そうです、そこ。ええっと、駐車場ないんですよ」

「いいよ、この時間なら路上駐車です。っと、ラッキーっと」

「混んでないといいんだけど、開けていいですか」

「はいよっと。いいよ。荷物置いてっていいよ」

「明日も晴れますね」

「雨よりはいいんだけどさ、やっぱこたえるよ、この暑さは」

「あっ大丈夫ですよ。空いてました」

「へえ、こんなところに、結構落ち着いた感じでいいじゃん」

「奥にします？こっちでいいかな」

「いいよ、ここで。さてと、なんにすっかな」

「なんでもおいしいですよ」

「とりあえず生、生？すみません。生2つ」

「私はえのきバターとネギ焼きかな」

「うんと、焼きソバたべよっと。今日さ、会場で焼きソバやってたんだけど、すげえうまそうだったんだけどさ、もう食うヒマなくてさ。それとトマトサラダ、すみません。トマトサラダって冷えてる？ああ、そう、じゃーつ」

「砂肝おいしいですよ」

「じゃ、砂肝と、とり皮。とりあえずそんだけ」

「はあ、元気だった？」

「ええ、なんか忙しかっただけだったような気がする」

「髪、ちょっと変わったね」

「まっすぐにして、ちょっと切ったんですよ。あっ来ましたよ」

「おっじゃあ、とりあえずお疲れ様」

「お疲れ様でした」

「ビールは裏切らないねえ。なんだっけ？ああ髪」

「そう、でももう2か月くらい前ですよ。4か月ぶりくらいですよ」

「そんなになるっけ？そうか、なんも無かったの」

「まあ、いろいろありましたけど。でもやっとでしたね」

「そうだな、あの後すぐに飲みにいこうって言ってて、やっと今日か」

「誘ってくれないから」

「いや、誘う気は満々だったんだけどさ、前の時、最後に変な事言っちゃったから、なんとなくね」

「変な事？ああ、寝ようっていうのですか？そんな、何今さらカッコつけてるんですか、みんなに知れたら笑われますよ」

「そうか、で、全然気にしてなかった？おっうまいね、トマト」

「ほんとだ、いいトマトなんですよ、今日のは。」

気にしないわけじゃないですか。次は口説くって言うておいて」

「そうか、じゃあ、今日は口説こう」

「まあ、飲んでくださいよ。明日も早いことだし」

「いや、じっくりいく」

「生もういっこいきますか？」

「生でいいの？」

「じゃなくて、いいですか？生で」

「うん、あっこっちもウマイ。よく来るの？」

「会社の子たちと時々来ます。よかった気に入ってもらえて」

「でも、今日は汗かいたなあ。早くシャワー浴びたいよ」

「早めに帰って、しっかり浴びて下さい」

「一緒に浴びよう」

「そんなこと言って。ほらもう顔赤いですよ。今朝も早かったんでしょ」

「6時」

「ほら、明日遅れると大変でしょ。ねぎ焼きはここでいいです」

「ちょっとちょうだい」

「どうぞどうぞ」

「うまい！よし、もう1枚お土産に焼いてもらって、ビール買ってさ
シャワー浴びて涼しい部屋で一緒に食おう」

「そんなことばっか言ってる、いつも冗談か本気かわからないです」

「今日は本気」

「ダメです」

「俺じゃあ？」

「そうじゃなくて、私結構のめり込むタイプなんですよ」

「じゃあ、俺ものめり込もう」

「だめですって」

「だってさ、前の時は今度口説くって言ったら、待ってますって言ったじゃん」

「言いましたけど、口説きもしないでいきなりシャワーって言われても」

「じゃ、口説く。今夜、僕と一緒にシャワーを浴びて下さい」

「シャワーだけじゃ済まないでしょ」

「それはわからないさ。シャワーだけかもしれないし、その先があるかもしれない」

「その先がこわいんじゃないですか」

「じゃあ、シャワーだけだったらいいの？」

「そういう意味じゃないですけど」

「来た！焼きそばだ！待ってたんだよ君のこと！うめえ」

「ほら、もう適当なんだから」

「なんだよ、真剣に口説かれないならそう言ってくれよ」

「だめですって。今度にしましょう」

「今日だめな日？」

「そうじゃなくて」

「だったらいいじゃん」

「なにがですか」

「わかってるくせに」

「そうじゃないです。本当のことを言いましょうか」

「おいしいねえ、言ってくれ」

「前にもお話ししましたが、私だって嫌いじゃないですよ。でもだから、その、寝
ちゃったとして」

「寝よう」

「ちゃんと聞いて下さい、寝るときって私は嫉妬が出てくるんです、と思うんですよ。変
ですね、日本語」

「いいよ、続けて」

「会ってからかれこれ6年くらいでしたっけ？その間は上下関係もあったし仕事の上のお
付き合いだったから、あれでしたけど、憧れみたいなものがあったのは確かです。でも、
それが今こうして差し向かいでいるだけでもなんか落ち着かないですし、もし寝たら、
きっと私本性出して変な関係になっちゃうと思うんですよ」

「で、どうなの？俺はだめ？」
「だから、あなたがダメなんじゃなくて、私がだめなんです」
「俺は構わないよ。じゃ、こうしよう。シャワーだけ。これはマジで今すぐ浴びたい。別々でもいいからさ」
「そんな、そんなの無理ですって。行っちゃったら」
「約束する」
「本当に？今からですか？私は明日休みだけど、現場でしょ、明日」
「シャワーと徹夜だったらシャワーをとるよ、俺は」
「意味がわかんないんですけど」
「じゃ、いいな。そゆことで」
「絶対に約束守って下さいね」
「守るって。今まで俺お前らに嘘言ったことあるか」
「ないですけど。みんな元気ですか？」
「元気だよ。今日も明日も何人か一緒だし」
「よろしく言うておいてくださいね」
「うん、じゃ、行くぞ。ああうまかった。ごちそうさま。御勘定ね」
「いくらですか？」
「いいよ、えっ安いねえ。はい、あつ6円だっけ、出すよ。はい」
「おいしかった、ごちそうさま。またこよう」
「やっぱり外は蒸し暑いですね」
「うわ、でもご安心を。すぐに爽快なシャワーが僕達を天国へと。乗って」
「ほんとうに、ですか？」
「ほんとうにです。幸いこの辺には沢山のホテルがあります」

「だいじょうぶなんですか？ほんとうはもう帰って寝たいんじゃないですか」
「帰らずに寝たい。あのさあ、どうせだったら、あのくらい派手なホテルの方が冗談ぽくていいと思わない？」
「そうですね。でも、ほんと、約束守って下さいよ」
「空いてるかなって、今日土曜日なんだよな」
「すごい、駐車場整理のおじさんがいる、呼んでますよ」
「ほら、陰美な雰囲気は微塵ありません。笑っちゃうな」
「いこうか」
「バッグ置いておいていいですか、いっぱいですね」
「おっ最後の1部屋だ。どうしよう変な部屋だったら、シンプルだね、いい？」
「いいですってゆうか、もういいですよ」
「なんだかんだ言ってさ、拒まないんだ」
「拒み通して分かれても、なんとなくすっきりしないじゃないですか」
「そりゃそうだ。やっぱ人気あるんだ、ここ。雑誌に載ってたもん」

「私も見ました」

「そういう記事って、やっぱ見るの？」

「言いましたよね。嫌いじゃないですから」

「さあ、どうかな、うん、広くていい感じだ。入んなよ。涼しい」

「ほんとだ、ビールにしますか？コーラありますよ」

「あのさあ、嫌いじゃないって、前に言ってた彼と？」

「最近会ってません」

「そう、じゃあ、こうゆうとこ久しぶりなんだ」

「そうですね、半年くらいかな」

「へえ、よしと、じゃシャワー浴びてくる」

「ごゆっくりどうぞ」

「ふわあ、さっぱりしたあ。生き返った。なんかさあ、全身を変な薄い幕みたいなので覆われた感じでさ、皮膚呼吸できないみたいな感じだったんだよ。それがきれいさっぱりなくなった。気持ちよかったあ。入る？」

「ええ、じゃあ、入って来ます。眠ってていいですよ。起こしてあげますから」

「うん、じゃあ、どうぞ」

「眠っちゃったかな？ああ、起きてました。飲みますか？」

「うん、ちょうだい。ポカリスウェット？冷蔵庫？サンキュウ」

「やっぱり気持ちいいですね」

「だろ。ううん、バスローブってのは、そそるね。そうやってさラッパ飲みなんかしたら、カッコいいってゆうか、いいねえ。3倍くらいいい女になるね」

「元がゼロだから、3倍してもゼロに変わりません」

「バカだな。いい女の要素をちゃんと持ってるって、俺ずっと言ってるじゃん」

「ありがとうございます。ああ、横になると眠っちゃいますね」

「身体伸ばすと気持ちいいだろ」

「マッサージしてあげましょうか」

「おまえなあ、約束とか言っておいて、今この状態でマッサージされたら、俺は自制できないよ」

「信じてますって。うつ伏せになって下さい。やっぱり筋肉質ですね、凝ってますねえ。痛いでしょう」

「うおっそっんなあ、筋肉・質って、ゆ、うか、単・にっうっ、やせて・るだけだ・って、うひゃあ、気持・いっ・いっ・うま・い・ねえ、うへっ・・・」

「うそみたいなことしてますね、ここ、どうですか」

「う・そ、みた・い？ああ、そこは、ちょっと痛い・・・うおっ。もういいよ。サンキュ

ウ。うわー、もう起き上がれないよ。ふう」

「少し眠ってもいいですよ、飲みます？」

「うん、よし、今度はマッサージしてやるよ。肩凝ってない？」

「凝ってます。なんか、すみません、うわ、うそみたい。みんな聞いたらなんて言うかな。女の子達、みんな、結構懂れてたんですよ」

「いいから楽にしるよ、ちょっと背中出していいかな」

「いいですよ」

「無防備だね。ブラ外すぜ、風呂上がりになんでブラしてんだよ」

「だって、してなかったら、いかにもじゃないですか」

「まあ、いいや、はい大丈夫だって、力抜いて。ここどう？」

「うわああ・・・、うわああ・・・、きもち・いい・で・すう」

「うまいもんだろ」

「さ・すが・に・慣れた・手つき・で・す・ねえ・・・」

「一生懸命奉仕させていただいているだけでございますよ」

「ふふふ・・・、あっ・・・ふう・・・天国です・よお・・・」

「無理を聞いてくれたお礼に、今日は尽くすよ」

「へへへ・・・あっ、とっちゃだめですよ、あーあっ・・・」

「全部なしのほうが、楽だろ、どう？気持ちいい？」

「もう、結局脱がせちゃったじゃないですか」

「正直に言ってみ、気持ちいいだろ」

「気持ちいいですけど、ああ、だめだ。はい、ここまでです、はい、おしまい」

「じゃ、キス」

「はい・・・さあ、タバコ1本吸いましょうか」

「いいよ後で。キスはいいんだ」

「キスって言ったって、子供同士みたいなキスはキスの内に入りませんよ。あ、でも、初めてキスしちゃった。あっあっ、今頃ドキドキしてきた」

「そうか、じゃあ、子供が吸うみたいにオッパイ吸うのはいいの」

「あっ、だめですってば、そ・こ・は、触わら・な・いって、あっ」

「やらないってゆう約束は守るから、触れさせてくれよ」

「えっ・あっ・・・えっ」

「またがってくれよ、そうそう、ほら」

「あついです、あっ、あたってる、がまんしてください」

「しばらくこうしていてくれよ」

「がまんしてくれますか、あうござ・か・ないでくだ・さい」

「そのまま、そう、すこし、からだ、おこしてみて」

「あっあっ、うっ、だめです。はい、もうおわり、です」

「あっ、」

「重かったでしょ私、あぶないあぶない。だめですってば。あっすねてる。すごいあついですよ、ここ。見てもいいですか」

「よく見てくれ、納まりそうもない」

「大の字になって下さい」

「変な気分だな」

「へえ・・・キスしてもいいですか？」

「いいよ、って、いいの？たのむよ・・・うーん・・・うわあ、すごいよ・・・」

「えっ・・・続けてくれよ？」

「これでおしまい」

「あのさあ、約束してたけど、ここまで来たら蛇の生殺しだぜ。たのむよ」

「今日はだめです」

「どうしても？」

「無理やりしないんですね。今度は、自分でやって見せて下さい」

「えっ、お前、いつもそうなの？」

「初めてですよ。男の人のを見るのは」

「見せたことは？」

「ないですよ。私経験は浅いですから、想像力はたくましいですけど、さあ」

「なんかSMクラブみたいだな」

「行ったこと、あるんですか？」

「ないよ。そういう趣味はまだ、ない」

「SMって叩いたり縛ったりじゃないんですか」

「そういうのだけじゃなくて、もっとメンタルな攻めというか」

「ふうん、さあ、見せて下さい」

「見せてくださいって、じゃあ、触らせてくれよ」

「そうやるんだ、おもしろい。なんで従うんですか？言うこと聞けばいいことあると期待していませんか」

「俺さ、もしSMやったとしたら、絶対にSだと自分で思ってたんだけどさ、もしかしたらMの気があるのかなって思っちゃったよ」

「そうですか？Mって何がいいのかな」

「何かで読んだんだけど、奴隷ってのがいちばん幸せなんだってさ。自分というものを亡くして、従うことが、一番幸せなんだって。

今、それが少しわかったような気がして、ちょっとこわいな、おれ」

「そろそろ着ましようか、もう1時だし」

「なっ、もういいだろ、たのむよ」

「だめです」

「じゃあ、絶対やらないから、ひとつだけ聞いてくれ。うつ伏せになって、うん、リラックスしてくれ、いいかい」

「あっ・・・」

「大丈夫、入れないから、ここに挟むから、それならいいだろ」

「それではまんしてくれますか」

「うん、そう、力入れなくていいから、そう、リラックスして、っううっ・・・」

「やさし・いです・ね・・・・あっ・・・」

「あといっただけお願いだ。仰向けになってくれないか。だいじょうぶ絶対に中には入らない。そう、足開くよ、こするだけ・・・楽にしてくれ・・・」

「ちょっと待って、コンドーム着けるから、汚さないから、そのまま、待って」

「いれますか」

「いれないよ」

「いいですよ、いれても」

「ほんとに、いいのか」

「ううん、やっぱりだめです」

「わかった、でも、今は続けさせてくれよな」

「ごめんなさい」

「いいよ、よし、じゃあ、手でそっと押さえてくれる？そう、ううっ、そう」

「ああ・・・あああ・・・うん・・・う・・・あ・・・」

「これなら、いいか」

「・・・うん・・・え・・・いい・・・あっ」

「んんんんうう・・・ああっっっ・・・あっ・・・はあ」

「あああっ・・・はあ・はあ・はあ・はあ・・・・」

「気持ち、よかった・・・」

「これって、セックスっていうより、エッチしたって感じだよな」

「うん、なんか、いやらしい感じ・・・」

「だよな・・・お前、こういうの意識して俺をそういう風にもっていったの？」

「・・・そうじゃ・なくて・・・イメージして・いたん・ですよ・・・今日のこと」

「・・・そうか・・・なんかさ、オッパイ触ったりキスもろくにしてないよ、でも、ある意味、これってプレイだよな。口でするのも、あれイメージ？」

「経験は・・・あるけど・・・うん、イメージ」

「才能あるよ、お前。風俗いったら結構いい線いくぜ」

「そうかな、興味はあるんだ」

「なんか、俺だけで悪いような気もするんだけど」

「そんなことない、私は・・・ちゃんといきました」

「何やってんだ！このやるー！」

ペン皿の上のこまごまとした物を掴んで投げつけながら、オフィスにいる全員が振り返るほどの大声で、柴山は彼の部下であるディレクターの桜井を怒鳴りつけた。

彼らが手がけた駅前のデベロッパー絡みの事業企画も、そのスケジュールをすべてこなして、途中大小いくつかのトラブルはあったものの、内容と演出、そして来場者たちの満足が得られたことが、延いては行政を始め関係各所の満足につながり、結果的に一応の評価を得られて、第一段階は終了した。

最終日のあとの撤収作業も思った以上にスムーズに進み、身も心もくたくたであるはず彼等だったが、なぜかすぐに帰りたと思うスタッフがいなくて、自然発生的に打ち上げが行われた。彼等のオフィスに近い行きつけの台湾料理店だ。

柴山も、彼のスタッフたちも心地よく酔った。この現場の約1か月前に別の仕事で骨折してしまった桜井も、松葉杖を使いながらもよくがんばった。

何度もおつかれさまと乾杯を繰り返しながら、柴山はこの仕事の本番初日に現場で何者かに脇腹と大腿部を刺され入院を余儀なくされた彼の有能なアシスタント、柳沢を思っていた。柳沢にとって年上の恋人で同僚の水野多恵子が乾杯だけ付き合っ、先に帰ったから、それはそれでいいだろう、と柴山は思っていた。

本来なら、これだけのビッグ・プロジェクトをここまで引っばってきて、ひとまず成功したのだから、気持ちが軽くなっているにもよさそうなものだが、柴山の心の中には取っても取っても取り切れない糸屑がついているカーテンのように重かった。

柳沢のことも気になる。だが、それよりも島崎啓子の存在が、自分の中ではっきりとした像を結ばなくなってきたことに少しずつ苛立ち始めているのだということが自分でもわかっているのに、どうしようもない。

柴山も彼のスタッフも酔った。

翌日、柴山は1日だけ会社を休んだ。その後は事後処理や次の企画のための準備が山積みであるから、従ってあっさりと日常に復帰した。

まだ夏は終わっていない。

ある日、得意先での打ち合わせから会社に戻った柴山は、部下の桜井に指示しておいた資料作成を確認しようとメモと共にデスクに置いてあったフロッピーディスクをドライブに差し込み、目当てのファイルを開いた。その仕事の出来は柴山の期待を見事に裏切っていた。外での打ち合わせが1時間以上余計にかかってしまったことや、地下鉄が夏休みの母子連れで、とても騒がしかったことも手伝って、その時の柴山は相当機嫌が悪かった。

そこへ持ってきて桜井の仕事のいい加減さである。

あのやろう、なめてんじゃねえぞ。

ファイルを閉じてフロッピーを抜こうとして（秘密）というタイトルのファイルが目にとまった。言うまでもなく、これは会社のディスクであり、しかも自分への提出用のディ

スクである。（秘密）だろうがなんだろうが、開けてはいけない事はない。

柴山はファイルを開けた。

「桜井ー！てめ、ちょっとこい！何やってんだ！このやるー！

いつ書いたんだ、こんなもん。やれって言ったこと、中途半端で、ミスばっかでよそんで、こんなもん、会社で書いていやがって。怪我とかあったから、多少の事は目えつぶってやってたのによお。ちょっとこい、ばかやるー」

柴山はまだ少し足を引きずっている桜井をミーティングルームへ押し込んだ。

「てめ、あれって俺が前に打ち上げかなんかの時に喋った話しじゃねえか。

そんなこたぁいいんだ。なんのつもりだよ、ディティール追ってくとわかるじゃねえかよ。ウチの連中だったら、みんなわかるよ。あれ、俺と啓子じゃねえか。おめ、わざとか？誰かに見せたのか？これ」

桜井は一瞬しまった、という顔をして、すみませんでした、と謝った。

桜井は大学二年のときから、この会社でアルバイトをしていて、5年かけて卒業した後、正社員となった。身長180cmと体格はいいが、気が小さいところが玉に傷で、お婆ちゃんっ子の典型のような男だったが、笑うと愛敬のある顔になって、憎めない奴だった。柴山が桜井を使うのは、彼がいるだけで場が和むという理屈ではない理由からだった。しかし、啓子のことになると桜井はなぜだか暗い男に変貌した。

「おめえが啓子のこと気にしてるってのは俺も知ってるよ。俺が啓子と特別な関係があると思ってるかもしれないけど、ああ、俺も多少わざとそういう言動してるしさ誤解されると思うけど、けどな、こういう暗いことやめろよ。お前は素直で明るいのが取り柄なんだし、それ取っちゃったら、ただのデブなんだからな。

だしさあ、仮に仕事できたってな、暗い奴はダメなんだよ。使えねえんだよ。

おめえ、今日は仕事もダメなんだからさったく、素人みたいなミスしやがって。」

桜井は、柴山さん、ほんとうにすみません。資料は今日徹夜してでも作りますからともういちど謝って、柴山も、明日朝見るからがんばれと言って、決着した。

そのときミーティングルームのドアがノックされて水野多恵子が柴山を呼んだ。

「柴山さん、お電話です。啓子ちゃん。島崎啓子。どうします？ここで出ます？」

「啓子？うん、まわして」

多恵子は、ハイっと答えて桜井が部屋から出るときに、ホールドアップされた観光客みたいなポーズで横歩きになってやりすごし、ドアを閉めた。

「もしもし、あっ啓子？おお、おつかれさんだったな。もう疲れはとれたか？」

「はい。柴山さんも。大丈夫でしたか？休めましたか？」

「1日だけ、ほら、打ち上げやって次の日。そう、もうまいったよ・・・」

も一さ、桜井の野郎がさ、そう言いかけてやめた。

「柴山さん、約束覚えてくれていますか？」

啓子の間に柴山は、本当に忘れていた事を思い出すように、あっと短く声をあげた。
本当に忘れていたのだ。そして、確認するように聞いてみた。

「デート？」

「そうです。誘ってくれましたよね。あさってなんですけど、大丈夫ですか？」

「当然。そうだ、何時にどこにしようか」

できるだけ平静を装って柴山は島崎啓子と打ち合わせをした。

「じゃ、楽しみにしてるから、うん、そう、まだもう少しかかりそうだよ。うん。

えっ、わかった言っておくよ。今家？そうか、うん、はいはい、じゃな。はあい」

「それじゃあ、あまり遅くならないように、がんばってくださいね。あさって」

さようなら、という言葉が出てきそうになった時、柴山は焦ってしまった。

電話の向こうという表現を、自分も使うし耳にもするが、実際に映像作品のように画面が半分に分かれて、こっちとむこうがあるわけではない。ケーブルを伝わっていく電気信号が電話器で変換されて声が耳に伝わる。柴山は、なぜだか今啓子と話している電話が、文字どおり電話線で、この2台の電話器だけが漫画のように繋がっている気がしていた。そして、啓子の「さようなら」がその線を切ってしまうような気がしてしまったのだ。

「啓子、あの、さあ、変なこと聞いてもいいかな？」

何を聞いているんだ、おれは。もっと別の、何か冗談でもいいじゃないか。

「変なこと？なんですか？」

適当な事を言って、電話を切るべきだ。

「うん、あのさ、今回の現場の初日？じゃなくて、2日目だ。あの、ほら隣のホテル、俺がいつもサボってコーヒー飲んでたところ、そうそう、午後のステージでさあ、柳沢が怪我したときだけど、その本番前って、啓子ホテルにいた？」

本番前だぞ、いるわけが、というより、いられるわけがないじゃないか。

「あっ、いや、いいんだ、いるわけないじゃん、何言ってんだ俺」

ほら、黙っちゃったじゃねえか、なんか言って笑わせて電話切れよ俺。

「ええっと、、、、」

「柴山さん、そのことですけど、あさって会ったときに、話しますね」

「えっ、、」

「じゃあ、あさって、よろしくおねがいします。さようなら」

電話が切れた。柴山は、ミーティングルームの椅子に腰掛けてタバコに火をつけた。
最初の煙を吐き出したとき、隣の編集ルームから大きな音が漏れた。

「ええっと、お送りしたのは、懐かしいですねえ、エレクトリック・ライト・オーケストラで・・・」

音が聞こえなくなった。

「すみませーん、ボリュームさわっちゃいました！」

「てめ、桜井！ぶっころすぞ、このやる一、さっさとやっちゃえ、ばかやる一。
だいたい、なにやってんだよ、そこで」

どうせ柴山の電話の相手が啓子だということで、聞き耳を立てていたとかだろう。

あいつ、マジで啓子に惚れたのか？と柴山は内心思いながら、そりゃ俺だろう！と突っ込みを入れる自分が浮かび、笑えてきて、少しだけ緊張がほぐれた。

やっぱり、桜井が発端なんだよな、和むのは、と思うと、気持も少し落ち着いた。

あと二時間ちょっとで、啓子との約束の日になる。楽しみにしていたはずの明日なのに、なんとなく不安みたいな変な感じが胸の奥で小さく脈を打っている。部下に対する苛立や怒りが原因なのか、単に疲れているだけなのか、自分でもよくわからないまま、柴山は紙のパッケージの中で少し折れ曲がった最後のタバコに火をつけようとしてやめた。

第5章 no time this time

明けても暮れても仕事漬けだったあの夏から、季節が三廻りした。
従って、柴山と彼の部下たちも三つずつ年をとった。

3年と一言で言っても、彼等にとっては5年にも10年にも匹敵した。

柴山の上司が退職した。社長との間に、価値観の食い違いが明かになったことが原因だが、直接のきっかけは、その上司が密かに独立を画策して会社を通さない仕事を勝手に受注した企画がトラブルのため、すべての水面下の動きが明るみに出る結果となったことだ。

柴山はこの業界の表と裏をこの上司から学んできた。当初は尊敬もしていたが、二年ほど経ったころから、彼の言動に一貫性が見られなくなって、少しずつ距離を置くようになっていった。だから、彼の退職にはほとんど何の感想も持たずに極めて冷静にことを受け止めた。

しかし、このことが柴山の環境を大きく変えることになった。

支社長のポストが空き、キャリアと実績から柴山がその席に着くことになった。

内心、柴山は不服だった。彼はそろそろ東京本社への移動の頃だと考えていたのだ。

この仕事を始めて間もない頃、東京本社のベテラン社員がチーフプロデューサーを務める企画に、若き日の柴山はディレクターとして抜擢され、その現場で彼はベテラン社員からこう言われたのだった。

「東京は、もっともっとすげえやつがたくさんいるぞ」

その時から、いつかは東京で勝負して見たいと思ってきた。

今回の騒動が発端となったイレギュラーな人事異動は結局、柴山と同年齢の制作部主任が東京本社へ移動し、柴山が支社長となった。同年で、しかも柴山より勤続年数が多いその主任に対する会社側の配慮であることは明かだった。

結局、柴山は3年間という異例のリミットを会社側に申請して支社長を引受た。

柳沢や多恵子たちは、柴山支社長を歓迎した。

得意先も半分以上が変わってしまった。

会社全体の経営方針の変化（というか確立）によって、戦略が一変したからだ。

今では、あの桜井が放送局の会議室での打ち合わせに単独で参加するほどだ。

何をやっても柴山に怒鳴られ叱られて、年下の柳沢からも認めてもらえなかった桜井だったが、2年半前のある時期から、人が変わったように仕事に没頭し始め失敗より成功の数が多くなった。声も大きくなって、身体も締まった。

かつて柴山に対する横恋慕から、自己の内に向かっていじけていた桜井を変えた二年半前の出来事とは、彼が恋焦がれた女性の失踪であった。

柴山たちが三年前に手がけたプロジェクトのメインキャストとして大抜擢され、尚かつ、その期待に応えて余りある成果をつくった島崎啓子だったが、それから約半年後、彼女は突然姿を消した。

はじめ桜井は、柴山が自分から啓子を遠ざけるために隠したのだと思い込み、以前にもまして、柴山を敬遠するようになった。

だが、啓子の失踪は柴山にも皆目見当がつかない突発的な出来事だった。それを理解した桜井は吹っ切れたのか俄然仕事に精を出した。

イベントの制作もやっている会社だから、日頃からたくさんのアルバイトスタッフを使っているし、大半は学生だから、新陳代謝がある。だから、その中の主要スタッフが事情で仕事を続けられなくなることもあるし、それ自体は決して珍しいことではない。だが、啓子の場合は桜井だけではなく、柴山が漠然とした興味関心を持ってしまった対象であり、そのビッグ・プロジェクトの件もあってか、社員や取引先、他のアルバイトスタッフ、さらにスポンサーの担当者にとっても少なからず気になる存在になってしまっていたから、彼女が消えてからしばらくの間は、柴山たちの周辺がなんとなく落ち着かなかった。いろんな憶測や噂なども飛び交った。

あれから二年半、今では啓子のことをみんなすっかり忘れている。年末に事務所の大掃除をしたとき、現場のスナップ写真が書庫から大量に出てきて、その場にいた全員が思い出話で盛り上がり掃除どころではなくなったことがあった。

その写真の中には、あの日の啓子の写真も含まれていた。啓子の名前が彼等の中に登場したのは、この時くらいのものだろう。

とにかく組織が変わり、メンバーも少しだけ変わって、柴山は今事務所の一番奥に置かれた支社長のデスクにいる。

書類やファイル、名刺などを整理しながら、引き出しの奥をまさぐって、1枚の絵葉書を手にとった。

自由の女神、エンパイアステートビル、トランプタワー、リバティーアイランドタイムズスクウェア、セントラルパーク、、、が16面分割にレイアウトされてその真ん中に白抜きの文字で「NEW YORK」と書かれている絵葉書だ。

22.APR.1996 という消印が押され、赤い文字で Air Mail と書かれている。

柴山さん ご無沙汰しています

お元気ですか？

私もやっとNew Yorkに来ることができました。

無謀にも一人旅しています。

とにかく いろいろな意味で

すごい街ですね。いろんな物見て

たくさん感じ取って帰ってくる
つもりですので、 またN.Y. 一人旅
失敗談でも聞いて下さい。
みなさんにもよろしく！

1996.4.20 啓子

プロペラ機と女性パイロットがプリントされた50セント切手が貼ってある。
アメリカからのエアメールは、たった50セントで日本に届く。
青色のボールペンで書かれたほんの短い文章を、柴山は何度か読み返した。
宛先は柴山の自宅の住所だったから、啓子を書いたこの手紙を彼の部下たちは知らない。

この絵葉書が届いてから、すでに三カ月が過ぎた。

ほんとに行ったんだな、ニューヨーク、
しかも一人でか。

「失敗談でも聞いて下さい」の一言が、柴山には気になっていた。

会うか、電話じゃなきゃ、聞けないじゃないか
会えるのか？啓子に？

妙にドキドキしてしまう自分が滑稽だった。

はたして、以前の電話番号で現在も通じるのだろうか。

今何時だ？彼の右手首に巻着けられた今日のスウォッチの文字盤には何も印がないモデルだったから、瞬時に正確な時刻は読み取れなかったから、デスクの上のビジネスホンの表示パネルを柴山は見た。

デジタル表示が午後7時45分を示していた。

柴山は手帳を取りだし、アドレスページをめくった。

島崎啓子の電話番号を見つけて、電話器のプッシュボタンを押した。

葉書が届いてから三カ月だ、もう帰国しているだろう

呼びだし音が鳴っている間、彼はそう思っていた。

7度目のコールの途中で受話器が上げられた。

「もしもし・・・」

小さな声だが、この声は、啓子の声だ。

「もしもし、柴山です、絵葉書ありがとう。ニューヨー・・・」

「柴山さん？柴山さん・・・」

「もしもし？啓子？・・・」

啓子は泣いているようだった。

「もしもし？啓子？まずかったか？電話、それとも、なんかあったのか？」

「・・・ごめんなさい。ああ、お電話かけてくれたんですね・・・」

「うん、なあ、もしあれだったら、またかけ直すけど・・・」

「うん、ごめんなさい」

「わかった、だいじょうぶか？」

「ほんとうに、ごめんなさい・・・柴山さんの声聞いたら・・・」

「そんな、大袈裟だな」

「今日、お父さんの一周忌で、ちょうどさっき帰ってきてお経をあげて」

「え？おとうさん亡くなったのか・・・そうか、タイミング悪かったな」

「柴山さん、会ってくれますか？」

「ああ、そのつもりで、誘うつもりで電話したんだ」

「来週、またお電話もらっていいですか？」

「うん、今日はごめんな、じゃ、来週のあたまに電話するから」

「はい、待っています。失礼します」

啓子だ。声が聞けた。泣いていた。父親が死んだ。今のは島崎啓子だ。

啓子との線がまたつながった。

柴山は、あの日から誰にも話すことなく、自分一人の胸にしまってきたことがある。あの日とは、柴山が啓子と初めて二人きりで会った日のことだ。

三年前の夏の終わりに柴山と啓子はデートをした。

柴山の国産4ドアセダンでドライブをして、太平洋が見渡せるリゾートホテルのランチを楽しんだ。片道2時間弱のドライブをすることで、一切の雑音をシャットアウトして、二人だけになるための柴山の提案だった。

啓子のことをいろいろ聞き出すつもりが、いつの間にか終始自分のことを中心に話しを進めてしまったことが今でも悔やまれる。

リゾートホテルはランチだけ済ませて、外に出た。

浜辺を歩きながら、とりとめのない話しをした。

30分ほどの散歩のあと、駐車場にもどる途中で、ごく軽いキスをした。

砂浜の途中から手をつなぎ、防波堤を超えるところからどちらからともなく腕を組んだ。

夏の終わりの海は、繰り返す波の音さえ、世界の終わりが明日やってくるような、穏やかさで装った怖さを感じる。

俺、啓子にすごく興味があるんだよ

気付いてました、最初から

こうゆうのって、気持の中味がどうあれ、やっぱ不倫って言うのかな

キスだけで不倫だと言われたら、ちょっと損だと思うわ

啓子の、ちょっと損、という言い方がおかしくて柴山は気に入った。

彼等は車に乗って海浜公園の駐車場から通りへ出た。

帰りの車の中は、穏やかな空気の中で、お互いの子供時代の夏休みの話しをして過ごした。

仕上げて柴山のいきつけのコーヒーショップでエスプレッソのダブルを飲んで、この日のデートは終わった。

そのコーヒーショップで、啓子は柴山に、例のイベントの本番中に柳沢が者かに刺されて大騒ぎになっていた時、柴山が見た女のことを話した。

その後、啓子はイベントの仕事を完全にやめて、教育出版関係の会社へと派遣会社を通じて入り、OLとなった。

啓子が突然仕事をやめてしまいスタッフたちは慌てたが、柴山は彼等に何も話さなかった。むしろあっさりとして啓子が最初からいなかったかのように振る舞う柴山を、スタッフたちは皆

「さすが柴山さんだよな。なんだかんだ啓子ちゃんとか言ってながらさ冷静に対応してるもんな。俺ら柴山さんが啓子ちゃん食っちゃってさ、ちょっと一緒だとヤバくなったから辞めさせたんだと思ったけどさ」

と受け止めた。

柴山にとっては好都合だった。

啓子がここへ来たのは偶然じゃない。

それを知ることは決して得なことじゃない。

できれば、元々啓子はここにいなかったというくらいに、みんなが忘れてくれたほうがいい。できるだけ早く。

年が明けて、柴山は二度啓子と会った。

一度目は、良く晴れた1月の終わりに、ショップインベーカリーで買った食パンとバ

ターピーナッツを持って、噴水のある公園でそのランチを食べ、フランスの印象派の作家たちによるコラボレーションを美術館へ見に出かけた。

夕方まで一緒にすごして郊外の住宅街にあるマンションへ啓子を送った。
その夜、啓子はここに泊まることになっていた。

二度目は夜に待ち合わせた。

ロバート・メイプルソープの写真展を開催しているギャラリーで待ち合わせて、鑑賞した後、ロシア料理のコースを楽しんだ。

ボルシチの赤い色は、赤カブを煮込んだ色だと教えたら、啓子は驚きつつその旨さを楽しんだ。この店のきのこのパイ包みスープはやはり絶品だ。

ロシアンティーで仕上げて、駅前のシティ・ホテルにチェックインした。

ツインの部屋のある階まで柴山と啓子はエレベーターを使って上がった。

部屋の前で少し長めにお互いの唇を吸い合って、啓子は部屋の中に消え、柴山は階上にあるラウンジへと向かった。

マンハッタンを2杯飲んで、柴山はホテルを出た。

その夜の啓子は、そのホテルに泊まることになっていた。

それからしばらくは柴山が忙殺状態だったこともあり、お互い連絡が途切れ、従って会うこともないまま時間だけが過ぎて行った。

また夏が来て、秋になり、新しい年になって、春から夏へ、夏から秋へ、秋から冬になった。

柴山の部下たちも、すいぶんとたくましくなってきた。

特に桜井の成長は目を見張るものがあった。

最近では柳沢とも、結構いいコンビネーションを発揮して、外部からの信頼性もアップしてきた。

多恵子は柳沢とのリレーションシップが良いかたちで続いていた。

最近またダンスを始めた。

「ちょっと余分な肉を落とそうかな、と思って」

と多恵子は言うが、いつ見てもバランスのとれたプロポーションだよなとスタッフの一人が真顔で言って、そいつは柳沢に蹴られていた。

去年までアルバイトスタッフだった男女一人づつが新しく柴山の部下になった。柴山の部下と言うより、今は柳沢と桜井の部下になる。

柴山も最近は寝るときには寝て、週に1度はジムで汗を流すようになった。
結局現場で多少くらい動いても、それは運動ではないし、健康を維持するものでもない
と、やっと最近思い始めたからだ。

その日も柴山は、信頼する部下に仕事を任せ、会員になっているジムへ車を走らせていた。

CDプレーヤーにはケネディ家が続けているスペシャルオリンピックへのチャリティーを目的としたコンピューレーション・アルバムがセットされている。

青い地に銀色の文字と、同じく銀色で描かれたキースヘリングのイラストが素敵なジャケットのこのアルバムは、赤いジャケットと緑のジャケットの物もあって、そちらはかなりヒットした。

青は内容がジャズだけだから購入者は少ないのだろう。

大きなCDショップでも、赤と緑の発売のときと違って、フェイスには並ばずやはりジャズのコーナーにひっそり並べられていた。

あとワンブロックでジムに着くという交差点で信号待ちをしている時丁度ロン・カーターの演奏が始まった。誰でも歌えるクリスマスのスタンダードだ。

赤信号が青に変わり、車を発進しようと時だった。

向こう側の歩道を歩く女性に、柴山は気がついた。

啓子だ。

直進を右折に変更して、柴山は歩道に沿って車を停めた。

ホーンを鳴らして呼び止めるのは無粋だと思い、運転席から外へ出た。

「啓子」

歩道を歩く女性は足を止めて、声の主の方を見た。

「柴山さん」

瞬時に笑顔になって、島崎啓子は柴山に歩み寄った。

「元気そうだ。どうしたんだ？今日は」

「柴山さんは？」

「そこのジムに通っているんだ」

「え？私もここの会員です！今まで1度も会わなかったですね、今からですか？」

「うん、そろそろ電話しようと思っていたところなんだ。」

「この前はごめんなさい。ああ、また会えたんだ」

啓子の言葉に柴山は、少し胸がときめいた。

「ご一緒しましょうか？」

「ああ、いいよ、じゃあ、車駐車場へ入れてくるから、先に入ってくれよ。

マシン？それともプール？」

「マシンです。プールは仕上げ」

「OK、じゃ、あとで」

柴山は車に乗り込むと（ラッキー）と言って、地下の駐車場へ滑り降りた。

スポーツジムには独特の空気がある。

どんなに親しくても、知り合いでも、一旦トレーニングに没頭し始めるとほとんどお互い口をきかなくなる。

柴山と啓子も例外ではなかった。

約1時間のトレーニングを終えて、彼等はロッカールームへと降りて行った。

それぞれ着替えを済ませ、1階のプールサイドへ出た。

柴山はスイミング・トランクとゴーグルとキャップのすべてが黒だった。

先にシャワーで軽く汗を流して、プールの2コースへ静かに入った。

25メートルのプールをゆっくり歩き、何度か往復した。

なん度目か数えていなかったからわからないが、ほどなく啓子が女子更衣室から姿を現わした。

ライトブルーのキャップにグレイのゴーグル、水着は濃紺の競泳用だった。

柴山は水の中から化粧をすっかり落とした彼女に軽く手を振った。

啓子はそれに気付き、シャワーを指差して微笑んだ。

思えば、啓子の水着姿を見るのは初めてだ。

先ほどのマシントレーニング同様、二人は泳ぎ始めると、それぞれのペースで相手のことはまったく気にせずに、水泳を楽しんだ。

からだに残っていた疲労感が消えていくのがなんとなく心地よくなってきたころ柴山は啓子をジャグジーへ誘った。啓子にとってもジャストなタイミングだった。

二人の他に、女性が二人と男性が一人、ジャグジーに浸かっていた。

気もちいいね、などと言いながら泡にまみれていると、男性が外へ出ていった。

しばらくお喋りをしていた女性二人組も外へ出た。

「お先に」

「お疲れさまでした」

「元気そうだな」

「柴山さんも、ジムなんかバカにしてたじゃないですか」

「俺はね、生まれ変わったの。もっと自分を大切にしようと思ってさ」

「そうですよ、身体が資本ですから」

「ホントだよな」

啓子が柴山の隣へ身体を滑らせて、位置を変えた。

プールの中には、連続して泳いでいる男性が一人と、コースをゆっくりと歩いている妊婦が二人いるだけだった。

「柴山さん、このあとは？」

「なんとでもなるよ。せっかくだから、久しぶりに飯でも食おうか」

「時間は、今日は大丈夫なんですか」

「なくたって、啓子と会えたんだ、ぜんぶキャンセルしても平気だよ」

「うれしい」

柴山は啓子の手を水の中で握った。啓子は柴山を見つめている。

柴山は啓子に顔を寄せ、まぶたに軽く口づけた。

啓子はそれに応えて、顔を少し上に向け、自分の唇を柴山の唇の位置に合わせた。

柴山の手はジャグジーの泡の中で、啓子の腰を捉えた。そこから手は下へと移動しながら、手前に動いた。

啓子は柴山の目を約15cmほどの距離からじっと見つめながら、水中の中の手は彼の太腿の上を這って足の付け根を目指して動いた。

更衣室から新たに女性が一人プールサイドへ出てきた。

妊婦二人が入れ替わりに更衣室へ消え、延々と泳いでいた男性がプールから上がり、その女性をちらっとだけ見て、ベンチに座った。

その間も啓子は、柴山の眼から自身の眼をそらすことはなかった。

柴山は耐え切れず、啓子の肩をとると彼女の身体を反転させ向こうを向かせた。

自分の股の間に啓子の尻を入れ、少し泡に沈み気味に体勢をとって後ろから両手で彼女の胸を触った。

啓子の手は自分の尻の後ろを動いている。

柴山は、このまま続けていたい欲求を鎮めつつ、一刻も早く啓子を抱きたいと強く思った。しかし、今、ジャグジーから出ることは、かなり勇気が必要だ。

「啓子、先に着替えて、ロビーで待っていてくれないか」

「・・・ええ、わかったわ・・・あ、・・・」

ほんの軽いキスをして啓子は自分も平静を装いつつジャグジーから出てシャワーを浴びると更衣室へと向かった。

柴山は気持ちを落ち着かせて、自らのボディチェックを済ませてから更衣室へ入っていった。

水滴をぬぐい、着替えて、ロビーへ向かった。

タバコに火をつけて、ソファに腰を降ろした。

啓子はまだ出てきていない。

女性の場合、着替えも勿論だが、プールの後はヘア&メイクを整えるためには男の約4倍の時間がかかる、と柴山は理解していた。

こんな風に啓子を抱くことになるとは、考えもしなかった。

出会ってから約二年とちょっと、デートもしたしキスもした。
誰にも話すことの出来ない秘密も持った。
だけど、セックスはまだだった。

10分が過ぎた。

15分が過ぎた。

わかっているつもりでも、柴山は少し苛立ち始めた。

20分経って来なかったらフロントに聞こう。
そう決めて、2本目のタバコに火をつけた。

「お待たせしました」

啓子がロビーに出てきた。内心ほっとした。
なんとなくだが、啓子はもう、ここにはいないのではないかと思っていた。
ほんの数分前のジャグジーでの二人だけの行為の相手と同一人物だと考えると、柴山は妙に興奮した。

「じゃあ、いこうか。何か食べたり、飲んだりする？」
「いない、時間がないから」

柴山は、この時の啓子の、なぜか切羽詰まったような表情が気になったのだが、今は欲望を叶えることが最優先だったから、啓子の目を少し見た後、出口に向かって先を歩いた。啓子がそれに続いた。

ここから一番近いホテルについて、柴山は頭の中の地図を広げた。
地下駐車場へ階段で下りる間、二人は無言だった。
車のロックを解除して乗り込むと、啓子の口から思いがけない一言が出てきた。

「ここでして」
「え？ここで？」
「そう」
「すぐ、2分くらいでホテルあるから」
「時間がないの」

低く、しかしはっきりと、強い意思が音になったように、柴山の全身に啓子の言葉が響いた。

第6章 MANEO-1999

約2000年前のヨーロッパにケルトと呼ばれる不思議な人々がいた。

めまいのするような渦巻き文様で身を飾り、酒と歌が大好き。ギリシア人ローマ人も一目置く知性と雄弁の持ち主でありながら頑固に文字を使わず極めて勇猛だったがひとたび戦に負けると、どっと落ち込む感情屋。

東欧からスペイン、アイルランドにいたる広大な地域に住み、共通の言語を喋りつつも、部族単位での暮らしにこだわって、国家を形成することはついになかった。

こんな彼等が、冷徹なローマ人の“組織”とまともにぶつかれば結果は目に見えているだろう。紀元前1世紀には、ローマ帝国に支配され、ケルト古来の言葉も文化も急速に失われてしまった。

幻の民となってもケルトの末裔を称する国がひとつだけあった。それがアイルランドだ。ローマ帝国のさしもの長い手も、ブリテン島からさらに西へ海を隔てたこの辺境の島国までは届かずに、ゲール語をはじめとするケルト文化、ケルトの精神を現代に保ち伝えることができた。

「ガリバー旅行記」のスウィフト以下、きら星のような文豪を輩出し、今日またアイルランド音楽が世界を魅了している。

雄弁と歌という、ケルトの得意技は、2000年の時を超えた。

アイルランドの過去の道のりは平穏ではなかった。8世紀のバイキング、12世紀アングロ・ノルマン軍団、16世紀ヘンリー8世&エリザベス1世のイングランド、17世紀クロムウェルの鉄騎隊と、名高い猛者たちが襲いくるなか、ケルト人は、組織作りが苦手というその欠点を遺憾なく発揮し翻弄され続ける。英国はアイルランドを事実上の植民地とし、徹底的に搾取した。19世紀半ばの大飢饉では、800万の人口が一挙に半減大勢の餓死者を出し、さらに多数の移民が海を越え米国へと向かった。

ケネディ、レーガンらの大統領をも生み、現在4千万人を越えるというアイルランド系アメリカ人には、そんな悲慘な原点があった。

アイルランドを訪れば誰しも宝石のような自然に目を見張るだろう。

その美しい大地を、歴史の波は、このようにむしろ、過酷に洗ってきた。

わずかに静穏な日々は、5～8世紀の初期キリスト教時代と、現在だけかもしれない。

1921年に英国からの自治を、1949年に最終的な独立を勝ち取ってからすでに半世紀、北アイルランド問題もようやく和平に向かいつつある。

プロテスタントを奉じる英国が宗教によるさまざまな差別と弾圧を加えても、彼等は決してカトリックを捨てようとはしなかった。

柴山は自分のデスクでアイルランドとケルトに関する資料に目を通していた。

彼にとって有能なアシスタントである水野多恵子がまとめてくれたものだ。

長い付き合いの得意先のひとつである出版社から、人気情報雑誌の創刊プロモーションの企画依頼を受け、そのタイミングをハロウィンの時期に合わせて展開しようというものであった。

柴山の部下である柳沢などは、10ヶ月も先の企画に現実味が湧かないと言って、今一つ取りかかる気になれないでいると周囲に漏らしていた。

実際ハロウィンと言っても、そのものが、まだまだ日本ではクリスマスほどの習慣性をもつほどに至ってはいないし、単にオレンジ色のカボチャを持ち出せば、企画が1本成り立つというような安易なアイディアなんかはダメだと、柴山は思っていた。そこで、あらためてハロウィンの起源を研究すべく、多恵子に資料作成を命じたのだった。

多恵子の仕事はいつも無駄がなく、レスポンスが早い。資料はわかりやすく、必要な情報をすべて網羅していた。

ハロウィンは古代ケルト人の万聖節が起源であることを初めて知った。

柴山も彼のスタッフも、代理店の連中も、当然スポンサーの担当者たちもハロウィンはアメリカのお祭りだと思い込んでいた。

カボチャとトリック・オア・トリートと仮装、せいぜいこの3つのキーワードを思い浮かべるのが精一杯だった。

古代ケルト人は万聖節の前夜、山から下りてくる悪魔を寄せつけない為に松明をたくさん立てて、一晩中歌い踊ったそうだ。これが長い歴史の中で少しずつ形を変えて、大西洋を渡り、アメリカンナイズされて、いまのポピュラーなスタイルができあがったらしい。

ケルト文化と、その歴史を説明する部分を、柴山はさきほどから何度も読み返していた。

一向に頭の中に入ってきて来ない情報を、ただなんとなく読んでいる状態だったが潜在意識のどこかに引っかかるものがあるようなしかし、それが自覚できない変なもどかしいような感じがさっきからしていて、神経がどんどん麻痺していくような、覚醒していくような、どうしようもない気分でした。

企画書を書くための資料だと言いながら、本当は、まったく別の目的で部下に資料を集めさせ、まとめさせたという後ろめたさも、少しあった。

多恵子の資料は、こう結ばれていた。

その昔聖パトリックは、三葉のクローヴァー（シャムロック）を手にケルトの民に向かって三位一体を優しく説き聞かせたという。

今、アイルランドでは、国のシンボルとして、いたるところに描かれたシャムロックを見ることができる。

四日前、柴山は会員になっているジムへ行き、そこで偶然、島崎啓子と会った。

啓子は四月に単身渡米し、マンハッタンから柴山宛に絵葉書を書いた。

それから三ヶ月ほど経ったある日、柴山は啓子に電話で連絡した。

彼女が電話に出たが、その日が偶然父親の命日であつたらしく、柴山の声を聞くと泣き出してしまい、何も話さないまま、電話を切った。

それから四ヶ月が過ぎて、空が冬の訪れを告げる様相になった頃、スポーツ・ジムの前で彼等は偶然再開し、一緒に汗を流して普通ではないやり方で初めて交わったのだった。

柴山は30代の半ばの男であり、若い頃は結構遊んできたと自負している。普通の恋愛の中でのセックスも、その場限りのセックスも刺激的なシチュエーションでのそれも、大袈裟に言えば修羅場も経験してきた。だから、今更どんなに特別な想いを寄せていた相手と初めてセックスをしたからといって、あとを引くことはないはずだった。

もちろんそれは、あくまで、“普通の相手”との場合に限る、と、“普通の状態”の彼ならエクスキューズを出すところだが、柴山は、あの日から、どこか心が別なところに行ってしまったような、そんな状態が続いていた。

そんな柴山を彼の部下たちは心配をした。彼等にとって柴山はいつでも想像を絶するタフガイであり、どんなに熱があつたって、骨折をしようが仕事に対する集中力と判断力は、絶対に真似することができないほどの人間であると、ずっと思ってきたからだ。もちろん、柴山が啓子と会ってそして、異常なセックスをしたことなど、彼等に知る由はない。

島崎啓子という名を出して、今でもすぐにピンとくるのは、多恵子ぐらいだろう。

柴山は、聖パトリックが説法の時に手にしたというシャムロックのことを考えていた。

だめだ、なにかを考える力が、今の俺にはない。全身と脳が死んでしまい、意志だけが生きているみたいだ、と柴山は思った。

柴山が会員になっているスポーツ・ジムの地下駐車場には、約40台の車を停めることができる。ジムの利用者以外に、ビルのビジネス棟に入っているオフィスの社用車や来社する車の利用もあるから、平日はどの時間帯もだいたい満車だが、土曜の夕方のこの時間はいつも比較的すいている。

オフィス街の中にあるこのクラブは、勤め帰りのOLやサラリーマンの会員が多く、週末よりも平日のほうが混んでいる。かつての柴山は週末にプライベートな予定をスケジュールに入れることなど考えられなかったが、立場も少し変わり、かなり融通が効くよ

うになっていたから、彼はジムの会員になろうと考えた訳だし、ゆったりと身体を動かす楽しみを味わえる週末のこの時間が、結構気に入っていた。

今は、ちょうど階段の踊り場に、いるみたいな感じだよ。

最近、柴山は周囲にそう言っている。

柴山と啓子は、半分以上が空車の駐車場に停められた彼の車中の息苦しさにもまれて、シートに座っていた。

マシントレーニングとスイミングで汗を流したあと、ジャグジーの中で何者かに導かれるように、お互いを求め合い、その昂りを押さえ切れずに目的を一つにした彼等は、着替えを済ませて、この駐車場に停めた柴山の車に乗り込んだ。食事はいらないと言う啓子を、すぐ近くのホテルへ連れていくつもりだったのだが、啓子はそのわずかな時間すら惜しんだ。

「ここでして」

その一言に自分を押さえられなくなるほど、柴山は若くはなかったから、どう対応しようかと一瞬とまどった。そのあと、更に沈黙してしまった。

どうしたんだ、啓子がここまであからさまに、俺を求めるなんて、いくらジャグジーの中でのスリリングな前戯が興奮を呼び覚ましたとしても、何を急ぐことがあるのだろうか。まして、こんな駐車場の車のなかで。

俺を刺激するために、わざとそう言っているのだろうか。セックスは好きだと、以前言っていたし、あれ？それは、桜井が昔書いたエロ小説だったか？いや、そんな話したことがあると思う、もちろん俺も嫌いじゃない。

以前付き合ったことのあるセックス好きの受け付け嬢は、いやらしい気分になると、女まる出しの態度だったし、ボーイッシュなイメージのダンサーだって、こんな時は、はにかんでいたものだ。

それに比べて、今の啓子はどうだ。さっきから彼女の目は強い意思を放射している。もし視線を見ることができたならば、赤いレーザー光線のように、どこまでも真直ぐに遠く、この駐車場の外の暗闇まで照射していることだろう。初めてあのオーディションで会った時の啓子、イベントの準備とリハーサルの時の啓子、ビッグ・プロジェクトでデビューした時の啓子、その現場で俺とのデートの約束を確認してきたときの啓子、そのデートのとき、初めて俺と口づけた啓子、その後、2回だけ俺に手伝いをさせた啓子、ニューヨークから 絵葉書を書いてよこした啓子と、父親の命日に泣いた啓子、ジムで一心不乱に汗を流し、タフに泳ぎ、ジャグジーの中で俺に反応した啓子。

さっき、ロビーに現われて、俺を見た時の啓子は、啓子ではないような気がする。

今、俺の横で、俺を求めている啓子も、啓子ではないような気がする。こんなに攻撃的な啓子は、初めてだ。

とにかく、ここを出よう。エンジンをまず、かけてしまおう。

「柴山さん、時間がないって言ったでしょ」

低く、しかし、強い口調で啓子が言った。

「以前柴山さんに話したこと、忘れたとは言わせない。あなたは、すでに引き返せないということを受け入れたくない気持はわかる。だけど、」

ちょ、ちょっと待ってくれ、どうしたんだよ、啓子。さっきから変だぜ。

もしこれがプレイなら付き合うけど、うん、確かニューヨークで流行ってるんだよな、ストーリー・プレイっていったっけ？SMが進化して、インテリ連中の間で流行っているんだって、何かで読んだ。そうか、啓子お前さ、向こうでなんか、そういう経験してきたんだろ？いやさ、最初っからなんか才能っての？いろいろ潜在的に持ってるコだと思ってたし、ほら、いろいろ話しも聞いてたからさ、そうか、もしかしたら、あの絵葉書からこのゲームは始まっていたんだろ、手が込んでるってゆうか、あれ？もしかしたら、いや、まさか、親父さんの話しは本当だよな、あれまでスクリプトのパーツだったら、ちょっとやり過ぎだもんな、わりいわりい、それはないな、だからさ、俺もきらいじゃないし、そういう趣向ならそれでもいいんだけど、とにかく、ここを出よう、ほら、こうしている間にホテル着くって、すぐそこだからさ・・・

「黙って。

柴山さん、何言ってるの？受け入れるの。現実だと前にも話したはず」

啓子の声が、この狭い空間を凍結させてしまった。

「柴山さん、あなたは何が欲しいの？お金？地位？おんな？おとこのこ？あなたは、そのどれも本当に欲しいわけじゃない。いい仕事？夢？理想？いい家庭？あなたは欲望を持たない人。孤独だって怖くない人。非難も中傷も、裏切られることだって怖くない人なの。今まであなたの人格と性格を醸成してきた目的を、まだ教えていなかったわね。あなたは」

ちょっと待てよ、なんだよ、俺の性格を？目的？啓子やめてくれ！

「あなたは、作られた人なの。あなたの母親も父親も兄弟も妻も子もすべて、今のあなたを作り上げる為の道具なの。何も欲しがらないあなたにとってあなたの家族は大切な人たちだったでしょう。あなたもずっと愛してきたでしょう。でも、私に出会って、あなたは自分自身が、本当は何を求めて何に向かい、どうなるべきか、迷い始めた」

たしかにそうだ。だから、無条件で手伝ったじゃないか

「タンパク質が分化していく際の選択肢の数は、天文学的数字で生命進化への道はその中にたった1つしかないのよ。しかも、この宇宙空間は、あと数年後に銀河団も蒸発崩壊、宇宙の大域構造が消滅してしまう。そうってからでは、なにもできない」

まてよ、数年後ではなく、数兆年後だろ、昔読んだ本に書いてあったぞ！

「あなたは、すでに、時間の流れを体感しているはずよ。
とにかく時間がないのよ。私の準備はずっと前からできている。あなたもすぐにできるはず。ほら、ここ、触って。さあ、、、どう、、、何も考えないで、本能で、、、ほら、だんだん準備ができてきたじゃない。柴山さん私の唇と舌以外を知らないでしょう。水着越しの胸はどうだった？太腿の内側は？さあ、空気に触れさせてあげましょう、、、つながるだけよ、ずっと、こうしたかったんでしょ？」

啓子、わかんないよ

「あなたが求めた私のからだを、開かれるのよ」

俺は、なにも、身体を求めた訳じゃない

「なんでもいいわ。
ほら急いで。シート倒すから、でも足を広げられないわね、ふふ、まさかあなたに限って、正常位じゃないとだめということは、、、ないでしょ？」

（限界だ、手をどけてくれ、啓子）
後ろのシートの方に進んでくれ、後ろから、いくから

「その気になった？理解しようとしなくて、あなたには理解なんかできない。あ、、、ふう、、、う、そう、、、」

ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう！

「もっともっともっともっと、はやく、もっとはやくはやくもっともっと」

啓子、啓子なのか？唇と舌の感触は、確かに啓子だ、だけど俺が求めた啓子は、もっと、こう、、、ああ、もうなんだって、いいけど、、、

俺は、啓子の、いや、啓子なのか他人なのか、もう誰でもよかったのだから、今、俺の下でうつ伏せになって尻を俺に押し付けている女の耳を噛んだ。

耳たぶのピアスを舌で転がしたら、外れてしまった。自分の身体を支えていた左手を口へ持っていき、舌先で外れたピアスを指の間に押し出した。

その間も、俺は腰を動かしていたのだから、指先に摘んだピアスを見て覚醒した。

それがプラチナのシャムロックだったからだ。

シャムロック、、、

俺は思わず言葉を発してしまった。俺の下にいる女が動きと声を止めた。

俺は動きを止めずに「父と子と聖霊の話なんか、忘れちまえよ」と言って女の胸を両手で揉んだ。女は静かに反応した。つい今までの感じ方からは明かに変化して身体を硬直させた。

「柴山さん、柴山さん、やめて下さい、、、」

なんだ？なに言ってんだ、今さら無理だ。せめて終わらせてくれ。

「柴山さん、お願いします。こんな形じゃなくて・・・お願い、やめて」

啓子、啓子だ、父親の命日に悲しみに包まれていた、あの時の声だ。

柴山は動くのをやめて、静かに啓子の中から出た。そして、車内の突起物に身体をぶつけながら、窮屈そうに運転席に戻り、腰をおろして、適当に股間を隠し、助手席から後部シートに渡るうつ伏せのブリッジ状態になって下半身がむき出しの啓子の尻に、捲れ上がったスカートをおろして隠してやった。

めったに車の中でタバコを吸わない柴山だったが、胸ポケットから一本取り出して、シガーライターを押し込んだ。

「なんだったんだ？啓子、やって欲しいと挑発したのはお前だし、やめてくれって言ったのもお前だ。こんな形じゃなくって言うけどさ、俺だって、ようやくお前を抱くんなら、こんなんじゃないかってさ、ちゃんとさ」

「柴山さん、さっきロビーに私が行ったときから、別人みたいだと思っていたでしょう？いいの、わかるから、あなたのことは、なんでも」

「また、わけのわからない話しなのか？もういいよ、今日は帰ろう。」

「シャムロック外してくれてありがとう」

「え？ああ、ピアスカ、なに？痛かったのか？」

「そうじゃなくて、多分気が付いてないと思うんだけど、私、今日は別のピアスだったのよ。家を出るときから柴山さんに偶然会った時も、ジムでトレーニングしている時も」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「エメラルドのピアスをしていたの」

「着け替えたのか？」

「ちがう、プールに入る前は小さなエメラルドのピアス、、、見て、このピアスをしていたの。水着に着替えた時から、さっきまでシャムロックが着いていた、というか、自分で着け替えたの」

「言ってる意味がわからないよ」

「私は自分で着け替えたけれど、自分の意思で着け替えた訳ではないの」

「誰かが乗り移ったとか言うなよ」

「信じなくても真実は変わらないけどね。柴山さん、私と初めてキスした時のこと、覚えている？」

「忘れないよ。そのあと、啓子から秘密を聞かされた日でもあるからさ」

「その時、私の耳にはどんなピアスが着いていたか覚えている？」

「ああ、その話しをしながら、シャムロックのピアス・・・え？」

「そうなの、同じシャムロックのピアスだったでしょ」

「・・・確かに、同じだ。つまり、このピアスの時は啓子じゃないって言いたいのか、そうゆうことなのか？」

「うん、そう・・・これも嘘に聞こえると思うけど、私は3人いるの」

「・・・ああ、頭も身体も、ついでにこれも、痺れてきちゃったよ。なんか飲みたい、喉がカラカラだ、出るぞ、ここから」

「はい、どこか、静かに落ち着いてお話しができる所へ行きましょう」

啓子の話しはにわかには信じ難い、でも、確かにさっきまでの啓子はどこか、いや、どこかどころか、全体的におかしかった。今、隣で身だしなみを整えている啓子こそ、柴山が出会った時からずっと不思議な恋心以上の気持ちを持ち続けてきた対象である島崎啓子である。シャツの裾をGパンの外に全部出して、ファスナーを上げながら、柴山は思った。

駐車場から出て、ほんの少し北へ向かうと、大きなラブ・ホテルが数軒並んでいる、とりあえず、選ぶ手間を省き、一番手前にあるホテルの駐車場へ車を入れた。適当に部屋を決めて、エレベーターに乗り、ライトで示された方へ廊下を歩き、ロックが解除されたドアを開けて部屋に入った。

柴山はとにかく、何かを喉へ流し込みたかったから、まず冷蔵庫を開けて缶ビールを2本取り出し、1本を啓子に渡してから、プルリングを起こして一気に飲み干した。啓子はソファに腰をおろして静かに缶を開けて、ひとくち飲んで、テーブルの上にビールを置いた。駐車場を出るところから、ここまで二人は言葉を交わさなかった。部屋の中は暖房のせいと浴室の湿気のせいで、空気が重かった。

「さっき、別の啓子って言ったらしいのかな、うん、別の啓子が俺に話したこととか、覚えていないのか？」

「全部覚えている。別に私は意識を失って、別の人格に身体と意識を乗っ取られるわけではないから、私はそのまま存在しているけれど、私はこの身体という器の隅っこのほうで封印される、わかりますか？こんな説明で、その間、別の私が私の身体を使うんです。封印はシャムロックのピアス」

「それって、二重人格とは違うのか？」

「そう解釈したほうが理解しやすいければ、それでもいいですよ。そしてもう一人の私が、別の器を持って、存在しています。これは以前話しましたよね」

「ああ、だから、俺はお前の頼みを聞いて、手伝ったんじゃないか。

要するに、異常にシンクロしている双児の片割れが二重人格だと」
「まあ、そんなところだと考えて下さい。実際はもっと複雑ですけど」

続き聞きたかったが、今の柴山には、その説明を聞いたとしても、気持と頭脳の両方に、わずかの空きスペースも残されていなかった。

「まあ、いいや、それより啓子、俺は今冷静に話を聞いていられる状態じゃないんだ。さっき、というかジャグジーの時から冷静じゃないんだ、わかるだろ、俺はずっと啓子を抱きたいと思って来た。こんな変なかたちでホテルにくるなんて思ってなかったけど、今ここで抱きたい、いいか？」

「はい」

「じゃあ、先にシャワー使うから、いいかな？別にカッコつける訳じゃないけど、啓子に対する俺の想いってのは・・・」

「わかっているつもりです」

啓子そう言って、俺はこの期に及んで何をぐだぐだと言いつてもならない言いつめたいなことをしているのか、自分で自分を嘲りながらテーブルの缶ビールを手にとった。柴山はジャケットを脱いで浴室に入っていった。とりあえず全身に熱い湯をあびせ顔を洗い、水滴をタオルでぬぐって備え付けのバスローブを着て浴室のドアを開けた。入れ代わりに浴室を使うよう啓子を促して、彼女は静かに、それに従った。

さっきの啓子は、やはり啓子じゃなかったのか？

部屋に入ってから啓子の様子を思い出しつつ、柴山はそう思った。

ベッドに身体を横たえていると、脱力感と神経がピリピリする感じが両方同時に現われてきて少し不快になった。

しばらくして啓子がお揃いの白いバスローブを着て、髪先端をタオルで拭きながら、浴室から出て来た。柴山はベッドの上で、上半身を起こして、足を投げ出して座っていた。

ベッドに近づいてくる啓子に立ち止まるよう、指示した。

そこで止まって

「はい」

むこうを向いてくれ、そう、足は肩幅くらいに開いて、自然体で

「はい」

ゆっくりと、バスローブの前を開いて、あっ、まだだよ、すごく時間をかけて、それを脱いでみてくれ。

啓子は、今度は返事をせず、柴山の指示をゆっくりと実行した。

そう、何も考えないで、そう、ゆっくり。

啓子はバスローブを両手で広げた。その下に下着をつけているかは今の柴山の位置からは確認できない。広げたバスローブをゆっくりとたるませて、首の付け根から肩甲骨の方へ襟の部分が滑りおりてきて徐々に背中全体が露になった。

最初に出会った時に感じた骨格のよさを柴山はあらためて、その目で確認できた。腰の張りは充分であり、肩幅の広さとの相乗効果によってウエストがくびれているなどと思わせた。バスローブは、ゆっくりとおおりていき遂に尻まで露になった。

もっとも、尻だけは、さきほど狭い車のシートの上で見た尻だ。腰と太腿までのラインは、とてもなだらかだった。高校の時はバスケットボール部だったと履歴書に書かれていたことを思い出した。足はその名残を感じさせる、しっかりしたつくりだった。

下着はつけていなかった。一連の動作に、柴山は興奮した。

バスローブが完全に床に落ちて、全裸の啓子が、今、柴山の前に後ろ向きに立っている。

貧弱に背中を丸めることも、腿を閉じて恥ずかしそうに身体をくねらすこともなく、堂々と立っていた。柴山は自分のバスローブを脱ぎ、ベッドから降りると、啓子の後ろに立った。

両肩に手を添えて自分の胸を啓子の背中に触れさせながら、髪の毛に唇を付けた。

耳にかかる髪を唇と顎でよけて、耳たぶにキスをした。ピアスはなかった。

小さく吐息を漏らした啓子を振り向かせて、口づけた。徐々に荒々なっていくながら、お互いがお互いを求めあった。少し引き寄せるように後ずさりして、柴山はベッドに腰をおろして、啓子が上にのしかかるような体勢で、二人は横になった。口づけの延長として、顔や首、耳や目蓋、胸のふくらみと乳首、腕や指、手首、腋と脇腹、腹全体と下腹部腿からふくらはぎへ、膝の裏側も、足の指とその間も、そしてお互いの性器とその周辺を、貪りあった。暖房のせいだけではない、ふたりとも身体じゅうが、いろんな液でべとべとになって、喉はからからに乾いた。

「啓子、俺は俗っぽい欲望しかない男だよ・・・」

「偶然、特別なものを手に入れてしまう、ことも・・・あるのよ・・・」

どれほど時間が経ったのだろう、二人だけの行為に没頭している最中のことを柴山はほとんど覚えていないし、それは啓子も同様に思えた。

今啓子は、柴山の胸に顔の右半分を乗せて、目を閉じている。直接胸に伝わってくる動悸が少し早く感じられた。

柴山は、左手で彼女の髪を撫でながら、息を整えている。

「夢中になっちゃったな」

「ふっ」啓子が少し照れたように笑った、と思った。彼女の左手が柴山の下半身をまさぐったからだ。

「たくさん出来たからって、それが、あなたの欲望なの？」

「え？」

柴山は左手で、今胸の上に顔を乗せている女の頬をずらして、半身を起こしながら、その顔を覗き込んで、思わず声を荒げた。

「別の啓子なのか？」

「別の？ああ、そうね、結構満足できたわよ。今日、初めてあなたをずっと見て来たけど、なぜ、あなたが選ばれたのか、わかったわ。」

「選ばれた？なんなんだ！」

「一人目の啓子をあなたは愛した。二人目の啓子に、あなたは本質を突かれた。」

「ちょっと待てよ。あれが俺の本質だと言うのか？よしてくれ」

「隠さなくてもいいの。私の前でかっこつけても、意味ないわ」

「突然、そうやって入れ代わるのか？今まで、そんなこと、ずっとなかったじゃないか」

「べつに、隠して来たわけじゃないわ。一人目が話したと思うけどあなたと肉体的な関係をもってきたのは二人目、一人目はプラトニックな部分を担当してきたの。でも、結局あなたと交わったのは、私だった。そうだ、最初のキスは一人目よ、ああ、それからあなた、その一人目を犯したことになるわね」

「やめてくれ、そんな言い方するな」

「ふふふ、とか言いながら、勃ってるのは、なぜ？」

「じゃあ、お前が三人目なのか、別の器だと、啓子、本当の啓子が言ってたぞ」

「本当の？ふん、まあ、いいわ、私は三人目じゃないの、確かに三人目は別に存在している。今、どこにいるか、私は知っているし、むこうも、こっちのことを知っている。」

「じゃあ、お前は誰なんだ？」

「誰でもいいじゃない、知ってどうするの？ねえ、それよりさっきバスローブ脱がせるの、やっぱ、演出家の感性なの？結構よかったわよ、あれ、脱ぎながら濡れたもの、ねえ、まだできる？」

なぜか、拒めなかった。どうして拒めなかったのか、それはわからない。

その後、俺は啓子の器を使った別の啓子と一晩中やり通した。組みしだしている女の中

に、本当の啓子と、ジムの駐車場で官能的に俺を責めた二人目の啓子が封印されていることを想像すると、俺はどうしようもなく昂ってしまい、頭の後ろと下半身が完全に痺れるまで、それを止めることができなかったのだ。

お前は、誰なんだ？お前は、誰なんだ？お前は、誰なんだ？お前は・・・

翌日の昼頃、柴山は強烈な吐き気と頭痛で目が覚めた。

啓子はすでにいなかった。身体中が痛い。股間が熱くて擦り切れているらしく、すごく痛む。いろんな痛みで声を出しながら、仰向けになった。

なんだってんだ？おれは誰なんだ？マネオってなんのことだ？

啓子、どの啓子かわからないけど、マネオの歌の元に、って、確かに言ってたよな。待てよ、言ってたか？いや、言われた記憶がある。

ああ、だめだ、頭が痛い、マネオでもスネオでも、なんでもいいじゃねえか、今日は何曜日だ？俺はまだ寝ていられるのか？水ないかな？結局、何回やったんだ？俺は・・・最悪だ・・・何時だ？・・・・・・

とりあえず、部屋のからの外線電話で会社に欠勤の連絡をとった。

適当な理由で、自分でも何を言ったか覚えていなかったが、とにかく連絡したことで、柴山は一安心した。彼はポケベルも携帯電話もなぜか頑なに拒み、従って、こんな時間まで、誰からも起こされずに済んだ。

痛む身体を腕で支えて起こし、ベッドからおりて、冷蔵庫を開けた。

ミネラルウォーターを取り出して、スクリュキャップをひねって開けごくごく飲んだ。テーブルの上にペットボトルを置いて、タバコの箱を探していて、銀色のピアスがあることに気が付いた。その横には、きれいな緑色の石が埋め込まれたピアスも、置いてあった。

シャムロックとエメラルドか・・・・・・

アイルランドなんか、IRAとサッカーとギネスしか知らねえよ・・・

タバコに火をつけた柴山は吐きそうになって目を閉じた。

あの日から四日後、ケルトに関する資料を読みながら、柴山はシャムロックの文字だけが残像のように眼の裏側にちらついているのがうっとおしかった。ブラックコーヒーを一口飲んで、今日はもう帰ろうかなと考えているところに、多恵子がCDを持ってきた。

「柴山さん、これいいですね、チーフテンズ、知ってます？

このアルバム、スパニッシュとアイリッシュのコラボレーションなんですって、ほら、ええっと、MANEO・・・マネオでいいのかな？

(マネオ?)

スペインも大昔ケルトがいたんですって、だからアイルランドの音楽とスパニッシュギターって、妙に解け合うってゆうか、マッチ？するらしいんですって、それを聴かせるのが、このトラッド・ソングでええとそう、マネオってゆうアイルランドの曲なんですって、使えますか？」

シャムロック、エメラルドときて、こんどはマネオか、もういいよ、

「うん、多恵子、俺今日はダメだ、全然頭まわんない。任せるわ、その辺のこと。ごめんな、けどな、この資料、すげえ分かりやすいからきつとうまくいくと思うぜ。」

「そうですか？よかった。私も結構、ケルトにはまりそうです」

「はまる？」

「ケルトって、人種でも民族の名前じゃなくて、ケルトの言葉を話す人たちという意味で、あくまで言語文化集団の名称なんですって、そのケルトの言葉のゲール語だったかな？それが第一公用語になっているアイルランドがケルトの末裔らしいんですけど、東にサンスクリット語、西にケルトって感じで、ある意味では、ヨーロッパ全体の起源になるんでっすって。よくわかんないですけど」

水野多恵子は明るくそう言って、じゃ、おだいじにと言いながら、自分のデスクに戻っていった。

ああ、だいじにするよ、あれ？多恵子の背中って、違うよな、まさかだって全然、背格好とか、似てるか？似てるかなあ、誰に？・・・やめた。

啓子が言っていたことを、またひとつ思い出した。

「柴山さん、時間が前後したりしませんか、ここ数年」

そうなんだ、なぜか、今は1994年、平成6年だと思う時がある。

実際は今って1996年だよな。

俺が啓子と出会ったのは1991年、あの地獄のような夏だった。

あれから3年か・・・いや、5年だ。あれ？

絵葉書の消印は確か1996.Apr たったよな、あれ？その3ヶ月後に電話して、、、ああ、やっぱ今日はだめだ、ってゆうか、今週はずっと、たぶん俺、まったく使い物にならねえな、いいや、帰ろっと...

デスクの上に置かれた二種類のピアスを指先でつつきながら、ため息をついた。

事務所にかかって来た電話の呼び出し音で、はっとして目が覚めた。

あ、えーと、一瞬眠ってたのか・・・うーん、、、さて帰る...

プラチナと宝石のピアスを引き出しにしまって携帯電話を持つと、おつかれさん、お先です、そう言い残して、柴山はオフィスを出た。

彼が作りはじめた企画書は、そのままハード・ディスクにセーブしておくように、部下に指示しておいた。そんな、なんでもない作業すら今の柴山にはおっくうだった。

あれ？携帯電話なんか、持ってたっけ？俺・・・もうなんでもいいや・・・

今年の春に契約社員になった女の子が、柴山のデスクトップを操作して、データをセーブした。

「柴山／企画／1999. December」

第7章 Still In Love With You

幅10.8メートル、奥行き4.5メートルの舞台の両袖には、大きな箱にリボンがかけてあるオブジェが置かれ、その前には、直径1メートル程度のリングの中で、愛敬たっぷりにくるくる回っている電気じかけの熊と犬そして、コケティッシュにデフォルメされたカエルたちが、舞台の前端で口をぱくぱくさせている。普通の家庭には絶対に納まらないくらいの高いクリスマスツリーが全部で6本、ディスプレイされていて、金や銀のモールと電飾が、決してでしゃばることなく、あたりを立体的に彩っている。

会場は、約1000人を収容できるキャパシティがあり、今日は円卓が配置されているため、実際には700人程度が集まっている。来賓の挨拶や表彰といったセレモニーが一通り終わり、乾杯も済んで、参加者はみな待ちに待った食事を楽しんでいるところだ。

このパーティーは、ある社団法人の家族例会で、年に一度、こうして年末に、このホテルの大宴会場を借り切った恒例行事となっている。柳沢は、前任者である柴山から、担当を引き継ぎ、今回はプロデューサーをして、一切を仕切ってきた。

柳沢は、今回の企画制作チームの編成も、自らの意思と選択で行い、彼のコネクションをフルに活かして、若くて有能なメンバーを集めたが、やる気は常に空回りして、お互いのエゴを引っ込める器用さも、問題点を突破するしたたかさも、そしてキャリアからくるノウハウも、少しずつ欠如していたため、一時は企画そのものが消滅するほどの危機もあった。

それを救ったのは、柴山のブレーンたちと、柳沢の恋人で、チームの有能なデスク役の水野多恵子だった。

柳沢は、その事実なかなかを認めたがらなかったが客に甘えるな、客を騙すな、客に媚びるな、という柴山のポリシーを自らに刻み込むという意味をはっきりさせてからは、サポートしてくれる多くのスタッフたちと多恵子の力と厚意を素直に、かつ積極的に受け入れた。

式典部分から乾杯、飲食歓談までの流れに関しては、アシスタントでも仕切ることは可能だ。

内容的には凝った演出もなく、定石的なものだったからである。しかし、このあとのアトラクション部分から、オリジナルになるわけで、従って、いよいよ柳沢の力量が試されることとなる。

現場での仕切りも当然だが、プランそのものと事前準備が、本番という名で公開され、反応という審判が、即時下されるのだ。

ライブというものは、残酷なものだ。まして、オリジナルの企画に基づくライブの本番というものは、まずオリジナルだから、誰も見たことも、聞いたこともないものを、プラ

ンとして通すところから始まり、よほどの信頼か、卓越した企画でなければ、そうは簡単にOKされることはない。

企画が無事通ったとして、それが実現できなければ、まさに絵に描いた餅を売ったことになり、長年築き上げた信頼も信用も、一瞬で吹き飛ぶ。

前もっての裏付けと、確実な制作進行の後、プランは実現化され、期日にスポンサーと関係者と、お客のまえて公開裁判にかけられるわけだ。

成功するのが当たり前、どんなに打ち合わせ通り、予算通りやったって、雨が降っただの道路が混んだだの、あれこれ文句を言われることもある。

アトラクション開始3分前の合図を、インカムで各セクションに告げて、柳沢はずいぶん昔、まだ駆け出しの頃に

「俺たちは神様か？、だけど、やっちゃうから、神様かもな」と、柴山が言っていたのを思い出した。

柳沢は緊張感を楽しみながら、時計に目をやり、インカムのスイッチをオンにして、全持ち場のスタンバイを確認した。

よっしゃ、俺も今日から神様の仲間入りだ。

「本番、いきます。BGMフェード・アウト、明り、20%、そう、ナレいくよ、ハイ」

アトラクションのストーリーは至ってシンプルなものだった。

クリスマス・イブの夜、部屋の中に飾られたクリスマスツリーの下には、パパとママが子供たちのために用意した、たくさんのプレゼントがある。

深夜、みんなが寝静まったあとで、小さな魔法使いの女の子が、おもちゃたちを目覚めさせた。3人の女の子の魔法使いと、ピエロたち、そして、不器用なゴリラのぬいぐるみが、音楽に合わせて踊り出す。なかなか上手に踊れないゴリラが滑稽だ。

ピエロたちは軽業を披露し、オブジェの箱が開くと、中からポニーとダチョウも飛び出てきた。飾ってあったカエルたちと熊と犬も、機械じかけで動き出し、飛び交うライトの効果と相まって、メルヘンチックに、明るく暖かみのある楽しさが、会場を包んだ。

子供たちは、舞台の前に集まり、笑顔でその様子を見ていた。おしゃべりや名刺交換に忙しかった大人たちも、みんな舞台を注目した。

徐々に、客席に笑い声が広がっていった。

「音楽変わります。（先生、準備いいか？よし）はい、転換、明りオフ」

舞台の上が片付けられ、マジックショーの小道具が出された。

「ナレ、入れてくれ」

魔法使いの先生という役で、本物のマジシャンが登場した。

「よし、明り、音。OK、ピエロ着替えは？」

「ほとんどOKです。あっちょっと待って下さい。はい、OKです。」

「よし、スタンバイな、柳沢さん、映像のタイミング下さい。」

桜井が、後輩を“さん”づけで読んだが、誰も気にとめはしない。

柳沢は桜井より年下だが、今日の柳沢はプロデューサーで、桜井はディレクターということで、彼は柳沢を立てた。

「じゃ、箱の中にマジシャンが消えたところで行くからな」

「はい、みんな、今の聞いてたな、俺が合図出すから」

その後も、順調に進行して入った。客席の反応も上々だ。

アトラクションタイムは、フィナーレに移っていった。華やかなレビューのように、脚線美のダンサーたちがロケットダンスを披露して、最後には先程、箱の中に消えたマジシャンが、サンタクロースになって、女の子の魔法使い三人を従えて、客席の後ろのドアから、スポットライトに照らされて登場し、キャノン砲から発射された銀箔と紙テープと白煙の中、ゆっくりと客席を横切ってから、舞台に上がった。

彼の肩には、リスザルが、ちょこんと乗って、会場全体をきょろきょろ見まわしていた。

ダンサーたちの踊りと、キャストたちが総登場して、マジシャンの手のひらで炎が燃え上がり、ファンファーレとともにショーは終わった。

会場内は、盛大な拍手で包まれた。

「OK！おつかれさん！最高！」

桜井はインカムでクルー全員に、そう言って、舞台を下りてくる出演者と握手をしながら、お疲れさん、お疲れさん、と声を掛け合った。

柳沢は舞台の袖の奥のほうから、誇らしげにスタッフたちと握手をする桜井に向かって歩み寄り、後ろから肩を叩くと、右手を差しだして、最高と言った。桜井が、完璧、とその手を握り返した。出演者の控室でマネージャー的な役割を担当していた多恵子が、舞台袖に来ていた。

「桜井くん、最高だったよ。ありがとう」

声がつまっていた。

「多恵ちゃん、お疲れ様でした。ほんと助かった、ありがとう」

主催者の代表が来て、柳沢と桜井と、ショーのすべてを絶賛してくれた。

「じゃ、私はこのあと、締め挨拶がありますから、最後までよろしくお願いします。
じゃ」

途中何度も彼等のプランを、面白くない、わからない、うまくいかないと言い続けてきた偏屈なおやじだったが、今は全面的支持者へと豹変した。

「柳、やったな」

桜井が再び柳沢の右手を握った。多恵子は柳沢のすぐ前に立って、涙を拭いていた。

みんな、お疲れ様でした、と言いたくても、涙で声にならない。柳沢は、以前、柴山に見立ててもらったイギリス製のスーツのポケットからハンカチを出すと、多恵子に渡した。

「お前も、いつまでも破れたGパンってわけにもいかねえんだからさ、俺がいいの見立ててやるから、今度のボーナスでスーツ買え。いいか、まずはイギリス製だぞ。なんでかって？背広ってなあ、語源はセビル・ローってロンドンの仕立て屋がたくさんあった通りの名前からきてんだ。だからさ最初のスーツはイギリス製にしる。最初が本物なら、あとは自分のセンスで選べるようになる。ま、女もそうだな」

柴山は、こうも言っていた、と柳沢は多恵子に話したことがある。

「男のスーツは鎧だ。俺は大事な現場やプレゼンには、スーツを一週間前から決めておく、そして、当日の朝、どんなに寝不足でも、疲れていても、朝起きて、髭を剃って決めておいたスーツと糊のきいたシャツとネクタイで武装する。要は、ここってことだ」と言って胸を指差した、と。

柳沢は、イギリスのハケット社の三つ釦スーツの内ポケットから、外国製のメンソールタバコを2本取り出して、1本を桜井に勧め、それぞれに火をつけた。

涙があとから溢れてくる多恵子が、鼻の下にハンカチをあてながら言った。

「・・・今の二人・・・を・・・柴山・・・さん・・・に・・・見せたいよ・・・」

「さあ、あとラスト、もうちょっとだから、準備しようぜ」

手をパチンと鳴らして、柳沢がそう言うと、クルーは再び緊張して、それぞれの持ち場に散った。

パーティーは終わった。また、来年もぜひよろしくお願いしますと、実行委員長に握手を求められて、柳沢も、こちらこそ、ありがとうございましたと答えた。撤収作業も滞りなく終わって、打ち上げでひとしきり盛り上がった。

彼等にとって、今日が、今年最後の現場となる。

打ち上げのときに、桜井が、最後の音、あれちょっと遅れただろ、お客は気づかなかったと思うけど、柴山さんがいたら、俺もお前も、吉野も蹴られてたな、と柳沢のグラスにビールを注ぎながら耳打ちした。

吉野は彼等の同僚で、今日の音響チーフの若干22才のクルーだった。

確かに、あれじゃ納得しないな、柴山さんは。柳沢が答えて、吉野は恐縮して、精進しますと、ジョッキのビールを飲み干した。多恵子は女性スタッフに囲まれて、ダンスとフィットネスに関する質問攻めに会っていた。

彼女は、今年、新たにこの街に東京から進出して来たスポーツ・ジムのイメージキャラクターに選ばれて、その健康美を活かしたポスターが、ちょっとした話題となっていたのだ。

ただ、彼女は調子に乗ってモデル業に欲を出すようなタイプではないから、本来の仕事を続けているのだ。

話題になるには十分すぎるポスターだった。

セパレートのレオタードを着て、全身にうっすら汗をかいた多恵子が、競泳用の薄い水着を着て、水滴をしたたらせた、もう一人の多恵子と抱き合っているもので、特にビルボードや、ビルの側面につけられた大型パネルは、見る者を一瞬、どきっとさせるものだった。

多恵子は、それがまるで自分とは無関係なことのよう、照れもしなかったし、無視もしなかった。クルーと一緒に仕事をてきぱき進める多恵子は、いつもの水野多恵子だった。

三本締があって、わいわいと騒ぎながら、全員が打ち上げ会場として使った居酒屋を出て、柳沢は桜井に多恵子を部屋まで送ってくれるように頼み、ちょっと寄るところがあるからと、みんなと別れた。

いいのか、と躊躇する桜井に、多恵子が、いいの、行かなきゃならないところがあるのだから、と桜井をタクシーに押し込み、自分も乗り込んだ。

おつかれさまでした、衛くん

柳沢衛はタクシーで柴山の自宅へ向かった。今日の進行台本を彼の家族に届けるためだった。パーティー自体が午後から夕方にかけてのものだったから、まだ遅い時間ではない。予め電話もしておいたから、今から行ったとしても、決して失礼にはあたらない。夜の繁華街を抜け出すのに、時間がかかるタクシーから、ネオンサインをぼんやり見るともなく見ている柳沢は、心の中でいろんな事を思っていた。

柴山さん、何度も話してくれたラジオシティのクリスマス、あれが今日すごく喜ばれました。予算とかは、きっと本物の何百分の一だけど、ハートは伝わったと思います。俺にはとても具現化できないと、思っていたけど、桜井や多恵子や、柴山さんの仲間の人たちが、みんなで支えてくれて、今日認められました。

俺、今日は柴山さんが見立ててくれた鎧を着ています。

「俺さあ、昔、まだこの仕事につく前のぷらぷらしてた頃にな、NHKで偶然、見たんだけど、ニューヨークのラジオシティホールで、毎年特別なショーがあってさ、それをやってたのさ、NHKで。10月から毎日1月まで4ヶ月もやるショーなんだけどさ、ラジオシティ知ってるか？

ほら、ラインダンスってあるだろ、ずらーっと並んだダンサーが、足を揃えてまっすぐに蹴り上げて踊るやつ、正確には、ロケットダンスってゆうんだけどさ、そこでクリスマス・スペクタキュラーってタイトルで特別にやるんだよ。おもちゃ箱からたくさんおもちゃが出て来て、サンタがトナカイのソリで空中を飛んで、ステージの上にアイスリンクがさ出て来て、フィギュアスケーターのペアダンスもあって、妖精や小人や動物や、大人も子供も、サンタの魔法で歌って踊るショーなんだよな。

俺さ、それ見て、いつか本物を生で見たいなあって思ってさ、まあこの仕事についてのも、多少はそれに影響されてつかかもしれないんだけどさ去年、ほら俺、社長と専務と3人でニューヨーク行った時に、それ遂に見たんだよ、ラジオシティで。45分ハーフの2部構成、サッカーみたいなんだけどさ、そりゃ、感動したよ。最高だった。すごく楽しくてさ、ずっと笑ってた。

でさ、驚いたのは、俺がNHKで見たのは、この1部だったんだよ。15分の休憩のあとは、すごく、宗教的になるんだな。

いろんなエピソードが綴られて、クリスマスの日を迎えて一旦はストーリーが終わるんだ。で、最後の20分くらい、何があるかってゆうとさ、イエスが生まれる夜の話が延々続くんだ。馬小屋に向かって、たくさんの人々が、どんどん集まってくるシーンを、ほんと延々やって、舞台の下手から上手に、大人や子供や、像やラクダや、あっ動物は全部本物でその行列が果てしなく続くわけだ。

その間はナレーションが流れていて、すごく厳かなんだよ。カルチャーショックだった。だってさ、1部はさ、みんな、観光客も多くて、時期も時期だったから、世界中からたくさん来ていてさ、ラジオシティのキャパは5千人くらいで、それ満杯だったんだけど、すげえハッピーって感じだったのが、2部の、このシーンになったら、すげえんだ、フラッシュが。もう年寄りなんか、みんな涙を流して見入っているんだよ。なんか、よくわかんないけど、なんか妙に感動しちゃってさ、宗教とか、そんなのは、全然わかんないんだけどさ。

まあ、その2部の内容は別として、俺さ、いつかあれをわかりやすくアレンジして、あのエンターテインメントの感じと楽しさを、自分で形にしてみたくてさあの、キャストたちの、輝くような誇らしげな笑顔と、それに拍手を送る観客の屈託のない笑顔が、忘れられないんだよ」

柴山さん、俺の理解力なんか、たかが知れてますけど、少なくとも、今日のショーは、楽しく仕上がったと思いますよ。でも、まだ、合格はもらえませんね、あんなんじゃ。

柴山が他界して、約1年が経とうとしている。彼の遺作となったハロウィンの企画も、この柳沢が引き継いで、なんとか実現させた。そのイベントがつい先月、紆余曲折の後に完結した。

この1年というものの、柳沢はそれこそ何かに憑かれたように、仕事に明け暮れた。

柴山の突然の死を受け入れるのを拒否するかのように、または、柴山の生前の評価を絶対に落とさないために、意地でもやるとげるといふものだったのかもしれない。柴山が柳沢に、話して聞かせた、ラジオシティのクリスマス・スペクタキュラーをこうしてかたちにするので、一周忌の供養になるのでは、と柳沢が言い出して、スタッフの全員がその考えに賛同し、スポンサーを粘り強く説得して、今日のイベントは成り立ったのだ。柳沢が手掛けた、このプロジェクトの本番用の進行台本を、柴山の妻に届けるために、いま柳沢はタクシーに乗っている。

柴山さん、あの世で啓子ちゃんとうろしくやってるなんて、俺絶対に奥さんには言いませんから。

そうつぶやきながら、柳沢は、両手の人さし指の側面で両目をこすった。

検証結果

ええ、柳沢さんを刺した犯人は、やはり1度目のと、同一犯でしたよ。

なんてゆうか、ちょっと偏執的な、とでも言うんですかね、まあ、目的などについては、今取り調べの最中なんで、今はなんとも申し上げられないんですが、とにかく、逮捕しましたから、はい、ご安心ください。それで柳沢さんの様態は、いかがですか。ああ、そうですか、それはよかった。

はい、ええ、はい、柳沢さんには何の問題ありません。あえて言えば、素敵な彼女が、もったいないかなあ、なんて、失礼、冗談です。すみませんです。あ、そうそう、ひとつだけ確認しておきたいんですが、ええっと、A T E N O V Xって、なにかご存じですか？イベントとかの専門用語とか？

え？そうですか、英語かな、と思って辞書ひいてみたんですがね、いや、ええ、結構です。はい。では、その後の報告は、またお電話で、はいはい、柴山さんという方にも宜しくお伝え下さい。じゃ、おだいじに。

最初の独白

私たちは、この世界に、父と子と聖霊をさがしに来ました。2000年に一度のこの時を、ずっと待っていたのです。いくつもの夜を越えて、いま私たちは、ここにたどり着きました。私たちの父、ドルイドの上王は、タラの地で、聖パトリックに論破され、その結果、遙か昔より語り継がれてきた教えを覆えされました。私たちは、ブリタニアやガリアへと分散し、更に東を目指して、私たちが生き延びる道を探し続けました。黒海の南へと旅を続けた部族が、そこで時代の波に洗われて、いつしか定住したのです。インドの古典語であるサンスクリット語は、ご存じですか。それが、ヨーロッパの古典語であるギリシア語、ラテン語と似通った構造を持っていることは？なぜなら、その源流とも言うべき、最も古い言語がケルトの言葉だからなのです。つまり、ケルトとサンスクリットが東西の文化を現代に伝えてきたわけです。私たちが、その末裔であると言って、だれもそれを信じないでしょう。柴山さん、あなたは、知恵の鮭に触れてしまいました。それを受け入れるか否か、実は、すでにあなたには選択権がないのです。私は鮭なのです。今日、あなたは、73万夜を数える今日という日に、私と口づけを交しました。これから先、何が起ころうとも、どうすればよいのか、私に口づけたとたんに、すべてわかるようになった。ただ2000年の時は、あなたを、そうは簡単に呼び覚ませないほど、長い時でした。私たちには、ある使命があるのです。あなたと同じ、フィンの血を持つ者たちに、知恵を与えらるというものです。このシャムロックは、聖パトリックがドルイドに教えを説く時に、手にした三葉のクローバーをかたどったものです。ピアスとして私は見に着けています。あと14の夜を数える間に、2人のフィンに、知恵を授けます。手伝ってもらいます。

私たちが、どこから来て、どこに向かっていくのか、あなたがそれを知ること、救済か、破滅か、この世は振り分けられるのです。あなたがいまここに存在することが、私たちの希望なのです。それから、私は、私だけではありません。あなたや、柳沢さんが見た私に似た女性、それは私なのです。あなたは、いま、なぜ、この、日本という国で、日本人の姿をしたあなた、と、わたしが、と、考えていることでしょうか。姿なんか、どうでもよいことなのです。これまでのあなたの過ごした時の中で得た知識などこの先に世界を待ち受けている事の前では何の役にも立たないでしょう。

感じて信じるのです。西と東が共存する場所はこちら以外にはないのです。

ひとつだけ、あなたに、言葉を授けます。A T E N O V X、明るい半月と暗い半月を隔ててくれます。柴山さん、すべてに、さよならを告げる日をあなたは、受け入れなければなりません。私が、私たちが、あなたの前に姿を現わした日ではなく、そう、ずっと昔から、それは定められていたということを、受け入れてください。理解は、きっと、できないでしょう。

最後に、神話をひとつ聞かせてあげましょう。

昔むかし、アイルランドの王にはフィアナ戦士団とよばれる最強の親衛隊がいた。隊長のクールは、英雄として名を馳せたが、あるとき・・・・

アクシデント

とろいんだよ、あいつは、だいたいさ、あのガタイでPAのヤグラに登って何しようとしたんだ？ 普段運動も何もしてないんだからさ、啓子ちゃんの前でカッコつけたんじゃないの？ 桜井って、啓子ちゃんが好きで好きでしょうがないんだろ？ で、柴山さんにあんだけ普段ボロッカス言われてりゃツラくなるのもわかるけどさ、別に柴山さんだって、それが理由で言ってるわけじゃないんだから、そこんところ、わかんねえかな、あのデブ。あん？ いいよ、事実なんだからさ。

でもさ、アイツ骨折って痛くて声も出せなかったんだろ？ 桜井のやつ変な落ち方したらしいからな。でもさ、一番驚いたのは、啓子ちゃんがさなんか、桜井の足首引っぱってさ、膝のどこ？、こうやって押さえてさ、一瞬だけど、すごい勢いで引っぱったんだってさ、折れた直後に。医者が言ってたけどさ、それしてなかったら、桜井治っても、かなりきつかったみたい。俺だったらそんな判断できないし、わかってたってこわくてできないよ。なんか、ますますわかんないな、島崎啓子。ま、彼女が何者であっても別にいいけどね、俺は水野さん一筋だから。

A.D.2000

あれから4年。再会した島崎啓子は、エスプレッソで満たされたディミタスカップから静かに立ち上る湯気の向こう側で、かつてと同じように、いつも少し潤んでいるその個性的な瞳でこちらを静かに見ている。

僕は最近視力が少し落ちた。

「柳沢さん、お元気ですか？」

僕はどう答えてよいのかわからなくて、妙な間を作ってしまった。
(柳沢の事知らないのか？それとも、何かの冗談のつもりなのか？)

「元気だよ。」ばかな答え方をしたと強烈に後悔した瞬間、啓子は、無垢な笑みを見せた。

柳沢は、かつて僕にとっては、なくてはならない右腕的存在の若いディレクターであり、弟のような存在の男だった。たくさんの成功も、たくさんの失敗も、ともに経験してきた。

柳沢の他にも、素晴らしい人材に恵まれて、僕は彼等と有意義な時間を過ごしてきた。けど、そんな彼等は、もういない。

去年の12月に、僕が仕事から帰る途中で意識を失い、深い眠りから目覚めたとき、僕のいる世界が、別なものに変わってしまっていた。10年ローンで改築した家も、そこで暮らす僕の家族も、父も母も、実の弟も、僕にとっての大切な人達が、すべていなくなっていたのだ。目覚めたのは、僕が独りで住んでいると思われるマンションの1室だった。表札と郵便受けに、柴山、という名前のプレートが付けられていたから、きっとそうなのだろう。

こんな話しをまともにとりあってくれる人は、いないだろうし、だから、僕は、このことを誰にも話していない。なぜだか、自分でもわからないけれど、パニックにならないでいる自分が、唯一、頼もしく思えた。

街は、どこも変わっていない。これがS F映画に出てくるような街並だったり、時代劇のオープンセットのようだったり、どこか違う国の風景だったら、もっと安心できたかもしれない。部屋から職場へ電話をかけてみた。聞き覚えのない声が、僕の所属する会社の名を名乗り、僕が自分の名を名乗ると、親しげに挨拶をされて、お休みの日ぐらい、仕事のことを忘れてくださいよ、と、笑われた。この世界に迷い込んでしまった僕を、この世界は、あっさりと受け入れてしまい、“休み明け”から数えて、3週間で退職した。けど、環境がどう変わろうが、職業は必要だ。幸い、こちら側でも、僕のキャリアは、あち

ら側と同じものとして、保証されているらしく、フリーランスという立場になることは案外簡単だった。これで、こちら側でも生きていける、と思った。

独りで紅白歌合戦をテレビで見て、新年を迎えた。インターネットも使えるから、僕が、こちら側に来てしまった、と言うより、僕にとってのかけがいのない人達が、全員、消えてしまった、と考えるべきなのかもしれないが、仕事上での付き合いがある人達や、取引先、バーやクラブからは年賀状や年賀メールが届いた。そんなメールに混じって、島崎啓子からのメールが届いたのが、1週間前だ。そして、僕らは4年振りに再会した。4年振りというのは、僕の記憶だ。うまく説明できないが、僕が僕であることを、知っている、ただ一人だと、僕は啓子に会うことは、自分の存在を確かめることだと思った。

そして、今、僕の目の前にいる啓子は、どの啓子なのか、それを知ることは怖いけれど、それを確かめなければならなかった。今日の啓子の耳には、何の変哲もない木の葉の形をしたピアスがゆれている。ヤドリギだと、さっき啓子が教えてくれた。

「柴山さん、ほんとは全部わかっているんですよね」

わからないよ、混乱もしているし、これがもし、ある日突然の出来事だったら、きっと発狂しているだろうなと思うけど。

「柳沢さんは、もう、いない・・・」

ああ、確かにこの世界にはもういない・・・

「オーディションで私を選んだこと、後悔しているでしょう」

選ぶように、なっていたんだろ？

「そうです」

僕は、啓子と出会ったこと、後悔なんかしてないよ。

「だって、家族や友達をすべて失ったわけだから、私たちのせいで」

信頼する部下たちもな。

「もしかして、柳沢さんたちも？そうでしたか・・・」

知らなかったのか？桜井も多恵子も、みんなだよ。

「多分、もう一人の私は知っているでしょうね」

やっぱり、君は、別の啓子だったのか。

「あちらの世界から、こちらへ来たのは、柴山さんと、私だけなのですね」

もう一人の啓子は？

「向こう側では、死んだことになっています。生きていますよ」

つながってはいないのか？

「向こう側と、こちら側に別れてしまうと、私たちは交信できません」

そうか。で、これから、僕たちは、どこへ行くんだ？

「それは、柴山さん、あなたが知っていくことだから、私はただ、あなたのそばでそれをサポートするのが使命だから」

知恵の鮭の話しか。

「あなたには、ドルイドの天文学と法律と、医学の知識、そして、賢者の知恵が、すでに授けられています。でも、決して無理をせず、あなたの意思で、それらを使ってください」

この世界で、今の話を理解できる人間は？

「いません」

やはり、そうか。

「私たちを、それこそ、呪殺したいでしょうね」

いや、そんなことは・・・。

「もしかしたら、あなたの大切な人達を、すべて殺して、あなたの環境を勝手に変えてしまっただけで、向こう側とか、賢者とか、狂人の仕業なのかもしれないんですよ、それが、私たちなのかもしれないのだし」

わからないよ。でも、啓子、

「あなたの運命を、翻弄しているだけかもしれない、私は、その罪は許されるものではないと」

啓子、僕は、それでも、君を愛してる。

「・・・・・・・・」

この世界にたった一人、俺を、俺の存在を証明してくれる人が、俺の一番大切な人なんだと思う。それが、啓子、君だ。

俺に、この世界をどうにかできるなんて、今も思えないし、そんなことはどうだっていいんだ。ただ、君が、俺の目の前で、動き、話し、俺の声を聞いてくれることが、今の俺にとっての、たったひとつの真実なんだよ。

俺が、こっちで目覚めて、すでに何日か過ぎた。これは夢なんかじゃないことは、もうわかっているんだ。だけど、俺は、君が単に、俺のサポートをするためだけに、存在しているのは、嫌だ。君たちは、俺に賢者の知恵が授けられたと言った。何が起ころうとも、どうすればよいのかがわかると言った。

だけど、俺が、今知りたいのは、君が俺をどう思っているか、それだけだ。

教えてくれ。

「私は、知恵の鮭なのです。何かを知りたければ、最初にあなたが、知恵を授かった“やり方”を試してみてください」

僕は、カフェの丸いテーブル越しに上半身を彼女のいる方へ傾け、そっと口づけた。柔らかな唇の弾力は、決して僕を拒まずに、静かに受け止めてくれた。

わからないよ

そう言って、僕は、啓子の手をとって立ち上がり、一緒に立った彼女を抱き寄せて、再び口づけをした。他のテーブルの客達や、ウェイトレスたちが呆気にとられたり、怪訝そうな、照れたような顔で、きっと僕たちを見ていることだろう。

僕と啓子は、お互いの背中を手のひらで、しっかりと捉えながら口づけを交し続けた。

an epilogue.

a new years day of 2001

お疲れ様でした！明日も宜しく願います。そう言って、何人かが先に上がった。

元旦に現場があっても苦にならない、というか、慣れてしまった。むしろこれが、ある年に急に無くなったら、かえって寂しいと感じるかもしれない。

毎年恒例の元旦イベントを無難に済ませ、彼等はオフィスへ戻ってきた。ビールとスナック菓子で、極簡単に現場の打ち上げと、年賀の乾杯をして、一休みしているところだ。アルバイトスタッフたちは、さすがに元旦の夜は、早めに帰した。今、オフィスに残っているのは、柳沢と桜井と吉野と、志水という、女子大生の司会者、そして、親元を離れて一人暮らしをしている学生アルバイトが数人、それから、いつも彼等と一緒に仕事をしている、音響機材会社の社長と、オペレーターである。柳沢の年上の恋人で、この会社のスタッフの一人でもある水野多恵子は、金沢の実家に帰省していた。悪さのし放題だなど、柳沢は仲間から冷やかされていた。この現場が終わったら、彼は金沢に行く。多恵子の両親に挨拶をするためだ。彼等は、来週、婚姻届を出す。そして禁煙を宣言するつもりだ。

多恵子は、妊娠していた。

ああ、今年も始まっちゃったな

オレ、今年も最初に見た顔が、お前らの顔だった

お互い様だっの

で、柳、多恵子は順調か

まだ、そんな変わらないって、体型だっ、そんなに、うん

ってことは、お前ら、やったな

そういうベタベタなこと言ってるから、お前は独りなんだよ

うっせえ、飲め、あっ、社長、ビール足りてます？

志水は？彼氏とかいないの？

いません、いたら、こんなところでビール飲んでません

てめ、じゃ、飲むな

毎年元旦の夕方はこんな感じだった。電話が鳴った。

「はい、ああ、おめでとうございます、うん、問題なし」

（多恵子）と受話器を指差しながら、柳沢が、一同に知らせた。

多恵子おー、おめでとう、と口々に言った。

「わり、ちょっと場所変わるから」そう言って、電話を保留にした柳沢は奥の会議室に入ってしまった。ドアを閉める時、部屋にいるみんなに、ゴメンと言った。

多恵子ととりとめのない会話をしながら、書庫にある古いファイルに触っていたら、中の一冊が床に落ちた。電話で受け答えをしながら、それを拾い上げて戻そうとした時、1枚の書類がこぼれ落ちて、面倒臭そうに、また拾いあげたとき、そこに書かれた文字が、妙に懐かしく、受話器を耳に当てながら、彼はそれを読みはじめた。柴山の字だった。

昔むかし、アイルランドの王にはフィアナ戦士団とよばれる最強の親衛隊がいた。隊長のクールは、英雄として名を馳せたが、あるとき敵に妬まれ殺される。

クールの妻は幼い息子フィンもまた殺されるかもしれないと不安になり、スリーブ・ブルーム山に住む2人の女戦士の元へ連れていった。そして

「この子もいつか父のようにフィアナ戦士団に入る日が来るでしょう。どうか勇者クールの息子として、彼が知るべきことをすべて教えてやってください」と頼み込んだ。

そのころ、フィアナ戦士団に入るには、とてつもなく難しい入団テストをパスしなくてはならなかった。たとえば、9人の男たちの槍が雨あられのように襲い掛かるのを、たった一つの楯で防いだり、自分の身長と同じ高さの棒を飛び越えたり、12冊分の詩を暗唱することなどなど、女戦士たちは、フィンに、闘いに必要な武術をみんな教えた。

そして最後の暗唱をマスターさせるため、ボエン川のほとりに住む賢者フィネガスのところへ彼を送った。賢者は、金髪のフィン少年を一目で気に入り、喜んで弟子に迎えた。

ところで、賢者がボエン川のほとりで暮らすのには訳があった。

この川には“知恵の鮭”が住んでおり、最初にそれを捕まえて口にした人はこの世のすべてを知ることができるといわれていたのだ。

賢者は長年“知恵の鮭”の捕獲を辛抱強く試み続けていたのだった。

ある日、フィン少年が詩を暗唱しているとフィネガスの叫び声が聞こえた。

急いで川へ向かったところ、賢者はどでかい鮭を捕まえて立っていた。

「フィン、この魚を料理してくれ。しかし、おまえは決して食っちゃいかんぞ」

フィンはいわれたとおり、火をおこして鮭を焼き始めたが、しばらくすると、こんがり焼けた魚の皮がプーッとふくれてきた。

こりゃいけないと、親指で押さえたとたん「アチチッ」思わず、火傷した親指を口にくわえていると、賢者が「さて、わしの魚は、焼けたかな」とやってきた。

そして、フィンの目に、自分が手に入れるために何十年も時を費やしたあの“知恵”が宿っているのを発見し、

「フィンよ。わしが教えることはもう何もない。おまえは王の住むタラへ行き、父親の跡を継ぐのじゃ。何か、困ったことがおきたら、おまえのその賢い知恵を使うがいい」

と悲しそうに語った。

フィンはただちに出発し、念願のフィアナ戦士団に入ったばかりか、それ以来、何がおころうとも、どうすればいいのか、自分の親指を口にくわえたとたんに、すべてわかるようになったのだ。

アイルランド神話「知恵の鮭」より

「・・・・・・・・・・予定通りでいいんだよね？・・もしもし、衛くん？」

「・・・ああ、ごめんどめんど、なんだっけ？」

「なに？寝てた？だから、予定」

「うん、大丈夫、とにかく、6日にこっち出るから、うん、夕方、家族の皆さんに、くれぐれも宜しくってことで、うん、わかった、言っとく、はいばいばい、あっ、明日も電話するわ、じゃ、バイバイ」

柳沢は、柴山の字で、会社のレポート用紙に書かれた文章を、もう一度最初から読み始めた。

三度読んで、会議机の上に、その紙を置き、窓の外に目をやった。

風が街路樹を揺らしていた。

10²³年後

N=RfpneflifcL

完

これは創作です。

(C)足立 剛 / Tsuyoshi Adachi / thin-p

参考文献：SPACE ATLAS (PHP研究所)

芸術新潮 1998/07 (新潮社)

ドルイド僧 (主婦と生活社)

ブログ：A'sf Radio 2MHz <http://asfradio.exblog.jp/>

Podcast：A'sf -Pod- Radio <http://asfradio.seesaa.net/>

ご意見ご感想はこちらからどうぞ asfradio@gmail.com

